

本
一千六百年史

210.1-E12ウ



210.1
-12



始



210.1
E.12



陸軍大臣
畑俊六閣下題字
荏原二郎著

少國民日本二千六百年史

東京三友社發行



14

無天
窮壤

俊
為

陸軍大臣 陸軍大將 俊六閣下題字



931
63

興亞日本の小國民へ

私たちの皇國を何と云ふのでせう！

日本！

そうです、私たちは日本人です。

皇國日本は今何をなそうとしてゐるのでせう！

興亞の聖業！

そうです！ 私達のお父さんが、お兄さんが大陸のあなたに尊い血を流して東亞建設の大業の爲に戦つてゐます。

私たちはこの興亞日本の若人です。

○

日本人！

私たちは日本人です！ 何といふ大きな感激でせう。

神のひらき給へる神國日本

私達は神國日本人です。

神がひらき、神の子孫が住む日本、私達の血の中には神代からの血が流れてゐます。

大陸に流した皇軍の血、

私たちの身體に流れてゐる血、

皆おなじ神からうけついで血です。

私たちの血は神の血です。

神代からの血です。

尊い極きわみです。

○

皇國日本！

神の御末の天皇陛下、現身まゐり神の天皇陛下

天皇陛下のしるしめす國日本！

選舉された人に治められたり、征服された人に治められたりしなければならぬ國民は本當に幸福だと思ふ日があるでせうか。

かくして皇統連綿二千六百年

神代の昔から私達の祖先は皇恩に浴した幸福の日を送つて來ました。

思へば尊き國 萬邦無比の國

○

太平洋の極まるどころ、大陸の極まるどころ、日出ずるところ、神はそこに止まり給ふて國を爲した。神州日本の始まり、

神の深きおぼしめしによつて建てられた國日本！

神の御心、産靈の御業を聖業と云ひます

聖業達成が日本の使命です。

興亞の聖業！おゝ！これこそ神の御心、産靈の御業、神の血が、日本の血が大陸を清めてゐます。私達の血も同じ血です。私達の血は、父の血です、祖先の血です、神の血です、聖業達成の血です。興亞の血です。

天皇陛下は私たちを「大御寶」と呼んで下さいます。天業達成、皇運扶翼の國人といふ意味です。

私たちは、祖先以来「天の益人」と云つて來ました。天業達成の人と云ふ意味です。私達は「天の益人」です。

○
私は心からこの一冊を皆さまのもとにお送りいたします。

天の益人の歴史です。天業恢弘の物語です。神代以來の血の記録です。私達の血の記

録です。

二千六百年！私達の血は何をねがひ、何を努力してきたかの記録です。

「小國民日本二千六百年史」私は謹んで皇國日本一億の同胞にお送りいたします。

皇紀二千六百年を迎へて

月光町にて 著者記

小國民日本二千六百年史目次

第一篇

(一) 祖國日本	一
(二) 皇國始まる	七
天照大神	七
素戔鳴尊	一三
天祖の理想	一七
祖國尊し	一九
天孫降臨	二〇
無窮の神勅	二二

(三) 皇國の礎固る……………二六

神武天皇……………二六

大和に都を移す……………二九

八紘一字の聖勅……………三一

皇太神宮……………三六

(四) 神靈の子日本武……………四一

皇子親征……………四一

皇子の勇武……………四三

蠻族蝦夷……………四七

征夷征伐……………五〇

日本人の龜鑑……………五三

(五) 日本と大陸……………五四

日本人は大陸民族……………五四

神代の大陸經營……………五五

神功皇后の使命……………五五

大陸經營の機熟す……………五六

崇神天皇の大陸經營……………五六

(六) 大陸經營……………五

仲哀天皇の大志……………五八

敦賀の行宮……………五九

三韓征伐……………六

三韓を經營す……………六四

大陸人の移住	六五
儒教傳來	六九
美術工藝の進歩	七〇
佛教傳來	七三
日本の表象聖德太子	七八
噫大和大民族	八一

第二篇

(七) 文化の華匂ふ

王朝時代	八五
十七條憲法と大寶律令	八七
美術工藝	九二

世界的大文學

詩歌	九五
----	----

著名作家々に現る

1 古事記三卷	2 日本書紀三十卷	3 源氏物語五十四帖	4 竹取物語	5 其の他	一〇〇
---------	-----------	------------	--------	-------	-----

(八) 文永弘安の役

文化榮えて	一〇七	
武道の華	一一〇	
1 八幡太郎義家	2 近衛大将重盛	一二六
武家政治	一二六	
蒙古族起る	一三八	
蒙古古來	一三一	
神國日本	一五六	
あゝ日本民族	一六一	

第三篇

(九) 戰國時代

元寇をさまりて

吉野朝時代

噫大楠公

戰國時代

一六五

一六七

一六九

一七六

(十) 東洋の危機

白人の侵略

白人の奸策

神國日本よ起て

(十一) 日本更生

一七七

一八四

一八九

一九一

第四篇

(十二) 東洋の黎明

封建時代の崩潰

王政復古

新政の大方針

國力充實

日清戰爭

三國干涉

義和團の亂

日本起つて白人を懲す

中華民國建つ

一九一

一九五

二〇三

二〇三

二〇六

二〇九

二一八

二二六

二二九

二三六

八

白人の奸計……………二四三

支那の排日政策……………二四六

白人の日本壓迫……………二五三

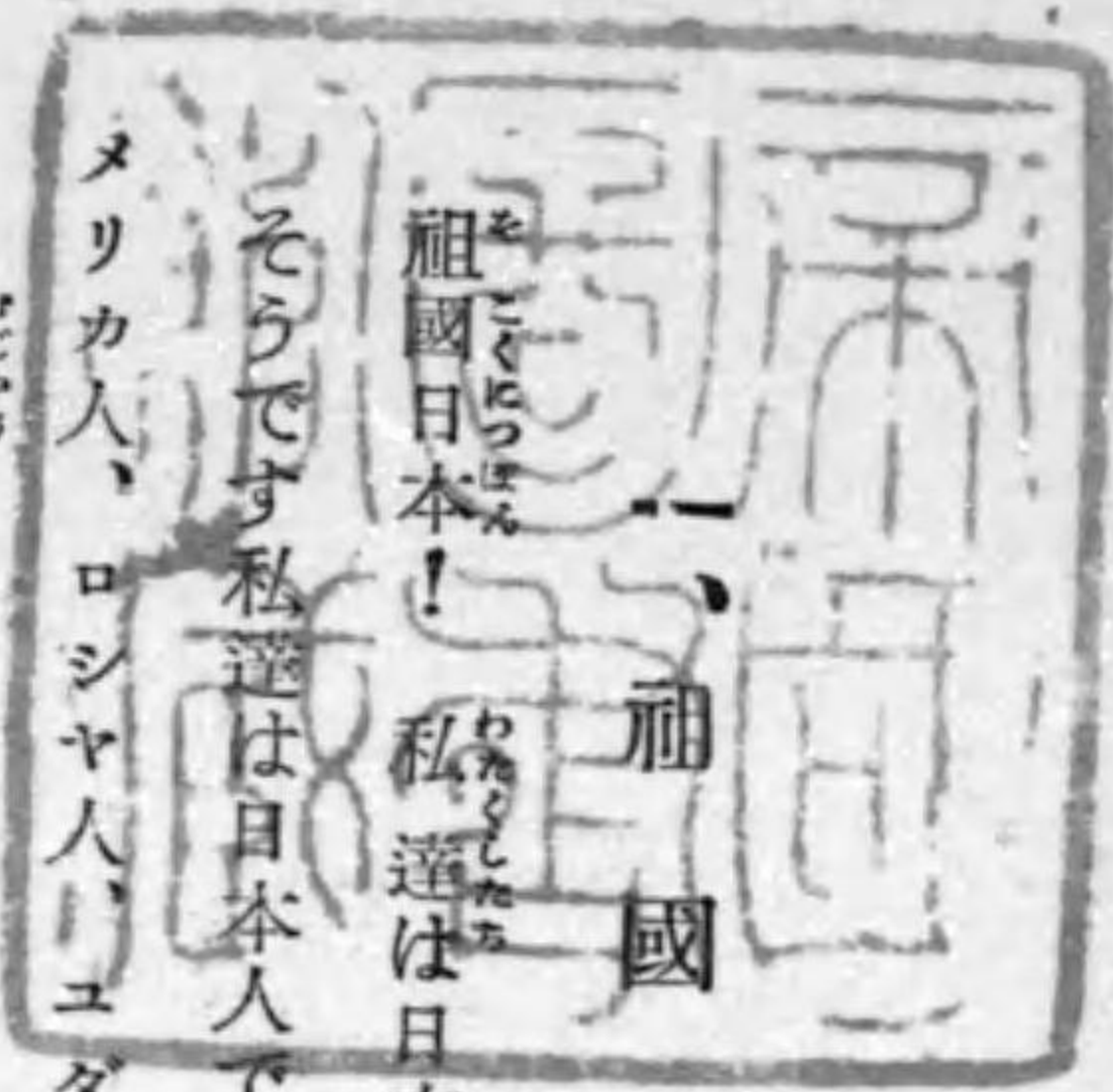
(十三) 興亞の第一聲……………二五六

滿洲事變……………二五九

興亞日本の使命……………二六六

小國民 日本二千六百年史

荏原二郎著



祖國日本！私達は日本人です。何といふ嬉しい事です。日本人！イギリス人、アメリカ人、ロシア人、ユタヤ人、そうかぞへて見るとやつぱり私達は日本人であつた事が無上に嬉しくなります。尊くになります。

祖國日本！そう呼ぶだけで私達には云ひ知れぬ感激が全身に満ちあふれて來ます。日の丸の國旗を仰ぐ時、「君が代」の國歌を奉唱する時、いや／＼たゞ「祖國日本」と云つただけで、私達はたゞ日本人に生れた事が無上に嬉しくなり、云ひ知れぬ誇り

と、幸福とを感じて來ます。ロシア人になるよりもユダヤ人になるよりも、フランス人になるよりも、私達は日本人であつたのが何よりもありがたいのです。

私達のお父さんも日本人と云ひました。

私達のお爺さんも日本人と云ひました。

私達先祖代々皆日本人と云ひました。

そして私達も日本人です。

私達の子孫も永遠に日本人と云ふでせう。

ありがたいことです。

幸な事です。

誇りです。

祖國日本！

あゝ悠遠の神代より 轟く歩調うけつぎて

大行進の往く彼方 皇國つねに 榮あれ！

おゝ！ 祖國日本よ！ 大八洲よ！ 私達は祖國日本に生れた事を何ものにもまして感謝せずにはいられません。

世界のどこよりも美しい國

世界のどこよりも尊い國

世界のどこよりもありがたい國

祖國！ 日本！

おゝ 清朗の 朝雲に 聳ゆる 富士の姿こそ 金甌無缺 搖ぎなき 我が日本の 誇りなれ！

何といふ感激でせう！ 人間と生れて、これ以上の大きな喜び、感激があるでせうか。

私達は日本人なのです。私達は日本に生れたのです。私達の祖國が日本なのです。

おゝ 祖國日本よ！

私達は限りなく祖國を愛します。生命を捧げて愛します。

祖國日本の往くところ！ 私達は血と生命を捧げます。私達の先祖も捧げて來ました。

祖國日本の大行進！

見よ 東海の空明けて

旭日 高く輝けば

天地の正氣 潑瀾と

希望は躍る 大八洲

おゝ 清朗の朝雲に

聳ゆる 富士の姿こそ

金甌無缺 搖ぎなき

我が 日本の誇なれ

起て 一系の 大君を

光と 永久に戴きて

臣民我等 皆共に

御稜威に副はん大使命

往け 八紘を 宇となし

四海の人を 導きて

正しき平和 うち建てん

理想は 花と咲き薫る

いま 幾度か 我が上に

試練の 嵐哮るとも

斷乎と守れ その正義

進まん道は 一つのみ

あゝ 悠遠の 神代より

轟く歩調 うけつぎて

大行進の 往く彼方

皇國つねに 榮あれ

あゝ悠遠いふまんの昔むかしからつゞけられた祖國そこく日本の大行進だいこうしん！ 私達もこの祖國そこくの血ちをうけついで生まれました。

私達の身體しんたいの中には祖國そこくの血ちが流ながれてゐます。悠遠いふまんの昔むかしからうけついで血ちです。祖國そこく日本と共に大行進だいこうしんをつゞけて來た祖先せんぞの血ちです。祖先せんぞ代々の血ちが私達の中に流れてゐます。

私達わたしの血ちは祖先せんぞの血ちです。

私達わたしの血ちは祖國そこくの血ちです。

私達の中には悠遠いふまんの血ちが流ながれてゐます。

この悠遠いふまんの血ちの歴史れきし！ この歴史れきしこそ祖國そこくの歴史れきしです。耳みみを澄すませば私の血ちがさゝやいてくれます。血ちの傳つたえた歴史れきし、血ちのさゝやく歴史れきし、これが祖國そこくの歴史れきしです。祖國そこくの歴史れきしはまた私達の血ちの歴史れきしです。私達は永遠えいゑんの昔むかしからあつたのです。祖國そこくの歴史れきしはまた私達の歴史れきしです。

私は今、私の血ちの叫こゑぶ、血ちのさゝやく歴史れきしをたどりたいたいと思おもひます。私達の血ちは何を思おもひ、何をしようとしてゐるでせう。祖國そこく物語ものがたり！ これこそ私達の血ちの叫こゑぶ歴史れきしなのであります。

二、祖國始まる

天照大神

いつたい私達の先祖せんぞはどなたでせう？

天照大神

いつたい私達の國くにはどなたが創はじめめられたのでせう？

天照大神

いつたい我が皇室くわうしつの御先祖みせんぞ様はどなたでせう？

天照大神



八

祖國の總べての基が「天照大神」であります。皇室のはじめも、國の創めも、私達のはじめも、すべて「天照大神」であります。

人民があつて、その中から天皇が現はれて國がたてられたのではありません。

すべての始まりが皆一緒なのです。

私達のはじめが國のはじめなのです。

いろ／＼の外國の歴史を調べて見ると、みんな、はじめに人民が雜然と住んでゐます、その人民の中から強いものが現はれてきて、他の人達を従えてゆきます。この従えた強い人が王様になります。従えられた人達は家來になります。そして、そこに國を

たててゆくのです。世界中の全部の國のなりたちがそうなつてゐます。だから國がはじまる時には仲間の一人が他の者を強い力で従えてゐます。

そして國の先祖は、王様に征服されてゐるのです。

それが日本は違ひます。強い人が天皇になつたのでもなければ、征伐されて國が出來たのでもありません。

日本には、いたましい建國の歴史といふものはありません。いたましいも、平和も、大體建國の歴史といふのがないのであります。

天照大神が總べての先祖で、その子孫の本家が皇室なのであります。だから國といふよりは家なのです。一軒の家なのです。その家がだん／＼ひろがつて來たのです。しかもこの家の先祖は神様なのであります。天皇陛下はこの神様の御子孫なのであります。私達も亦神様の血からわかれた子孫です。

私達の血の中には神様の血が流れてゐます。何といふ有難くそして尊い事せう。

九

そしてこの物語もこのすべてのもとでいられる天照大神からはじまります。

さて天照大神といふお方はどんな方でいらつしやつたでせうか、國史でもならひましたやうに、すべての原でゐらつしやる天照大神はまたお徳の高い、美しい、氣高い神様でありました。

私達が毎日いたゞいてゐる稻の事から、麥豆などの造り方を教へて下さいましたのも大神であります。

私達が毎日着てゐる着物の事を工夫して下さいましたのも大神でありました。

蠶を飼はされて、生絲をとり、それを機に織つて着物を造る事をお考へ下さいましたのも大神であります。

現在伊勢の皇太神宮に天照大神と御一緒に祀られてある豊受大神と稻麥などの食物のことを研究なさつたのでありますが、その時大神は御自ら田畑に植ゑさせられて

「これは我が子孫の爲に、よい食物となるであらう」と、仰せられてゐます。

これを思つただけでも私達は日々の御飯をいたゞく時、大神にお禮を申し上げないではいられません。

「いただきます」

御飯をいただく時に、私共の挨拶申上げるのは、私共の爲に御飯の事をお教へ下さいました大神にお禮を申上げるのに別ならないのです。

本當にありがたく、尊い事です。かうして天照大神のお出でになる世界は何時も春の様に温い光が照り輝いて、平和な月日が永く／＼續いてゐました。

ところが大神の一番若い弟様に素盞鳴尊と申上げるお方がゐました。

このお方はお年もお若いし、元氣なお方で、なか／＼に悪戯もなさいました。

大神が田や畑をおつくりになつてゐらつしやる所にやつて來ては、せつかく造つた畦をこはしてしまつたり、よく熟のつた作物をこつそり抜いてしまつたりして、お姉様をこまらせて愉快がつてゐました。

しかし大神は何時いつもにこ／＼お笑わらひになつてゐて、けつしてとがめるやうなことはありませんでした。何時いつかはお直なほりになるであらうとお考へになつて、決してお叱しかりになりませんでした。

素 蓋 鳴 尊

今日は先祖せんぞの神々に奉る尊はたい機を織をる日です。大神は、すつかり機屋はたやを清きよめられて、静しづかに機を織をつて居られます。

其處れいに例すまのをのみことの素蓋鳴尊すまのをのみことがやつてまいりました。見ると大神が一生懸命しやうけんめいで機はたを織をつて居られます。それをごらんになると又何時いつもの癖くせがむら／＼と起きて來ました。何か惡戯いたづらをして、女神めがみさま様をびつくりさせてやらうと思つて、あたりを見廻みまはしますと、ある／＼、馬屋うまやの中にたくましい馬がゐます。尊みことは早速さつそく生馬いきうまの皮かはをめら／＼とめくつてしまふと、血ちのしたたるのをかゝえて、こつそりと、機屋はたやの屋根やねの上うへに上つて來ました。

丁度ちやうど、大神が一生懸命しやうけんめいで機を織をつてゐられる上までくると、突然とつぜん！ 血ちのたれる皮

のはいだ生馬いきうまをどさりと上から落おしました。

機はたは目茶苦茶めぢやくぢやくにけがされてしまひました。もう先祖の神様にお供そなへすることも出來なくなつてしまひました。

何なにといふ惡戯いたづらでせう。亂暴らんぼうでせう。流石りやうじの大神もすつかりお怒いかりになり、そのまゝ、天あまの岩屋いはいといふ石室いしむろの中なかにおかくれになり、入口いりぐちの岩いはの戸とをびしやりとおしめになつて、そのまゝおひきこもりになつてしまひました。

かうなると亂暴者らんぼうものの尊みこともびつくりしてしまひました。神々様達は一層いっそうびつくりいたしました。大神が居をられなくなつたのでは世の中がまつくらになつてしまひます。

神々達かみかみたちは本當ほんたうに心配しんぱいしました。

どうしたら、もう一度いちど女神めがみさま様に出でていたゞけるだらうかと心を悩なやしました。とにかく出來るだけのまごころを示して、出ていたゞくより別に方法はうはふがないのです。そのまごころをどうしたら岩屋いはいの中なかにお出での大神かみに傳つたえることが出來るか、一番いちばんよい方法を

考え出さなくてはなりません。

そこで神々達は全部して天安河原といふところに集つて、相談することになりました。色々相談した揚句にやうやくの事で、大神に神々のまごころを十分にお伝えすることの出来る方法が定まりました。

もう神々達も一生懸命です。

智慧の神と云はれた思兼命が總指揮にあたられました。

天岩屋の前に立派な神樂殿がつくられた。

神樂殿から四邊一面に榊の木や白・青の布が美しくかざりつけられる。

榊の木には八咫鏡といふ立派な鏡や八坂瓊曲玉といふ美しい胸飾りがかけられる。

附近には鶏を集めさして来て、ひつきりなしに鳴かせる事にいたしました。かざり火を煌々とたく。

一切の準備がすつかりと、整えられて、神々は全部こゝに集まりました。

神々の至誠こめた祝詞があげられる。つゞいて雞共がなき出す。神樂殿には天鈿女命といふ美しい女神が登場する。神々達は一齊に手を拍つて拍子をとる。鈿女命は立ち上る。

そして舞は始まる。

鶏は鳴きたてる。

神々は聲をそろへてはやす。

舞ふ者も、はやす人も一生懸命です。至誠を岩屋の中にまで伝えたい。そしてもう一度大神に出ているかなくてはならぬと云ふのですから皆一生懸命です。

そうした騒が一つのかたまりとなつて厚い岩戸を透して、中の大神のところまで響いてきました。

至誠は天に通ず。

遂に神々の至誠が大神に通じました。大神は岩戸の中で、神々のこの心を協せた願を

きこしめされて、これで素盞鳴尊が反省されて、これから立派に生れかはるであらうことも感ぜられました。

そこで、いよいよ再び岩屋からお出まし下さることになりました。

神々達はどんなに嬉しかったこととせう。

至誠は天に通じたのだ。遂に大神はお出になつたのだ。

大神は美しく神々しい御姿を岩屋の前にあらはしました。

世の中は再び明るくなりました。

神々達は天地もわれんばかりに喜びました。

これだけ考へて見ても、天照大神がどんなにお徳が高く、そしてすべての神々から敬ひ慕はれてゐたかといふことがよく判ります。

大神がいらつしやるといふことがどんなにか楽しい事であつたか、幸であつたこともよく判ります。

素盞鳴尊もこれからはすっかり心を入れかへ、決して悪戯などをして喜ぶ様な者でなく立派な神様となりました。

出雲地方にお出になつて、この地方を苦しめてゐた八岐大蛇といふ頭が八つ、尾が八つと云ふ世にも恐ろしい怪物を退治して、人民を救つて下さつたのも、素盞鳴尊です。この時大蛇の尾から出て来た靈劍天叢雲の劍を天照大神に献上いたしました。

大神は昔の悪戯者が、すっかり生れ代つた様子を御覧になつて、どんなにお喜びになつた事とせう。この方のお子様が出雲大社に祀られてある、有名な大國主命であります。

天祖の理想

扱て、岩戸神樂の誠をもつて、天照大神がこの世に再びお出になつてからは明るく、楽しい日が長らく續いて居りました。

しかし、天照大神の考へてゐられる事は、神の思召しのままの立派な國の基をしつ

かりと打ちたてる事でありました。

世の中で一番幸福な國

神様の御徳を傳へ、それを現はしてゆく國

尊い國

光榮の國

やがて人類を神の御恵に覆はせる事の出来る、天業恢弘の重大使命を帯びた國。

そした、氣高い、立派な國の基を打ちたてる事を考へていられました。

この有難い思召しと、尊い使命をもつて、その基が打ちたてられた國こそは、何と幸福なそして、尊い國であることせう。

しかもそれが、我が祖國日本であつたことは——我々は何と云つて、日本に生れたことを感謝していゝのか判らないではありませんか。

考へれば、考へる程、胸の熱つくなる感激が満ちあふれてまいります。

祖國尊し

世界の一番東端に開かれた國日本。神の御心によつて開かれた國日本。

天照大神によつて始められた日の國日本

世界の日は日出ずる國、日本からさし上ります。

日の神によつて始められた日の國日本、日出づる國日本から出でた日は世界中に、光と熱とをあたへてゐます。

美しい四季と、溫暖な氣候と、恵まれた産物と、そこに天業の國、日本の基がひらかれる事になりました。

この大使命を帯びて、日本の地に下だつてこられたのが、天照大神の皇孫瓊瓊杵尊であります。

明治天皇御製

天津神定め給ひし國なれば

わが國ながらたふとかりけり

天孫降臨

天照大神のお考も定まり、いろ／＼の準備も整ひましたので、こゝにいよいよ日本の地に天孫が降臨遊ばす事となりました。

お従ひ奉るは天兒屋根命、天太玉命、天鈿女命、石凝姥命、玉祖命を始め八百萬の神々雲霞の如くであります。

出發に先きだつて、崇嚴な儀式が始まりました。

天照大神は瓊瓊杵尊并に八百萬の神々に向ひて、玉音いと尊く、勅が下されました。

御神勅

豊葦原千五百秋之瑞穂國ハ、我が子孫ノ王タルベキ地ナリ、爾皇孫就イテ治メヨ、寶祚ノ隆エマサンコト當ニ天壤トトモニ窮リナカルベシ

これ實に我が建國の大本をお示しになつたもので、天壤無窮の皇運もこゝに始まり、萬國無比の我が大日本帝國の基礎もこゝに定まつたのであります。

次いで、大神の御手づから「三種の神器」をお授けになりました。

八咫鏡と天叢雲劍と八坂瓊曲玉であります。智慧を現す寶鏡と、慈悲を示す寶玉と、勇氣を語る神劍とが授けられたのであります。

特に明知を本體とする寶鏡をお授けになるとき

「この鏡を視ること、我を視る如くせよ」

と、仰せられました。

この三種の神器こそは皇位のみしるしとして永久に傳えられてまいりました。かうして、崇嚴なる儀式の中に神國日本の大行進が始められたのであります。

無窮の神勅

何と云ふ神々しい姿で、我が國の國史が産れ出た事でありませう。それも實に遠

い、久しい昔の事でありませう。

何といふ深く、そして大きな願によつて、我が國が始められたことでありませう。御神勅も太古から傳えられた言葉で書いて見ませう。

御神勅

豊葦原千五百秋之瑞穂國是吾子孫可レ王之_レ地也宜_レ爾皇孫就而治_レ焉。行_レ矣。
寶祚之隆當_レ與天壤無_レ窮者矣。

何といふ堂々たる宣言でせう。崇高なる言葉でせう。天神天照大神にして、はじめて云へる言葉でありませう。數千年の大古に、のたまはされた大宣言であります。仰せられてゐる事柄は、大體二つになります。一つは皇位のことです。

「是吾子孫の王たるべき地なり」

天照大神の御子孫が治めらるべき地であるとお言葉であります。これでゆるぎのない國體の礎が定まつたのです。萬世一系の天皇をいたゞく大本が定まつたのでありま

す。何といふ、尊くありがたいことでありませう。國の始る以前にしつかりと國體が定まつてゐたのであります。

しかもその次に仰せられてゐることは、我國の未來の豫言であります。

「寶祚の隆えまさんことまさに天壤とともに窮りなかるべし」

本當に有難く、尊いお言葉です。日本の國が盛になつて行くことは天地があるかぎりつゞくのであるといふのです。未來永劫に、永久に日本の國は榮えてゆくといふのであります。

永久につゞくといふだけではないのです。永久に榮えてゆくといふのです。何といふ嚴肅な豫言であり、宣言でせう。しかも、私達はこの國の國民として生れて來たのです。この神様の始められた、しかも永久に榮える日本の國に私達は生れて來たのです。何といふ幸福なことでありませう。何といふ深いよろこびでありませう

皇位のみしるしとして傳えられた「三種の神器」は日本の天子様の御徳を示された

ものであります。これについて吉野朝の大忠臣北畠親房卿が「神皇正統記」の中に次の様に記してあります。

- 一、八咫の鏡の様に分明なる御徳をもつて天下を照し治めること。
- 二、八坂瓊曲玉のつらなりひろがつてゐる様に天下全體を治めること。
- 三、神劍をもつて、悪者共を征伐すること。

との仰であります。

三種の神器の世の中にあることは、丁度天に日と月と星のあるのとおなじであります。鏡は日であり、玉は月であり、劍は星であります。この日と月と星の位につかれるのが天子様であります。

思へば嚴かな定と使命であります。この定と使命を果すべき大行進が瓊々杵尊の御降臨によつて始められたのであります。

大神の勅をうけし、八百萬の神々、瓊々杵尊に従ひ奉り、この世に御降臨あらせ

られました。

私達も亦この大神の血をいたゞきうけつぎ、或は勅をうけし神達の子孫なのであります。このありがたさ、この尊さ、この感激、それは何といふ言葉によつていひあらはすことが出来るものなのでありませうか。

そこに私達は國民として、なさねばならぬ大きなつとめのあることをひし／＼と身の中に感じてくるではありませんか。

私達の先祖も代々皆このつとめをはたすために一生を祖國に捧げて來ました。その祖先の血は代々うけつがれて私達の中にまで流れてゐるのです。

西洋に「光は東方より」と云ふことばが古くからあります。誰が教へたのか判りませんが、意味深いことばではありませんか。

天照大神は「八坂瓊曲玉のつらなりひろがつてゐる様に皇威をひろめよ」と仰せられました。そのために「皇威に従はぬ、悪者共は征伐せよ」と勅されました。

今やまさに、皇軍百萬は東亞の天地に聖戰の劍をとつて、戦つてゐます。我々の大使命天業恢弘の願を實現させるためであります。

「光は東方から」天皇陛下の御稜威があまねく世界にゆきわたる光榮の日は近からんとしてゐます。私達の使命は重大です。

三、祖國の礎固る

神武天皇

皇孫瓊々杵尊は三種の神器を奉持して、神々を従えさせられ、日向國高千穂峯に天降りになり、次に吾田の笠狭崎にお移りになつてそこにお宮を立て、君臨なされてゐました。

しかし、あまりに西の方にかたよつてゐた爲に、天照大神の御神勅のお心にそひたてまつて、人民を安らかにするには不便でありました。そこで三代目の神武天皇

は、皇兄や諸皇子、群臣をお集めになり會議をひらかれて仰せられました。

「瓊々杵尊がお降りになつてから、此處に三代といふ長い年月を経て來たが、遠い東の國々にはまだ悪者どもがはびこつて、甚ださはがしい。早くこれを平けて、天照大神の御神勅の御心になふやうにしなければならぬ。それに東の方の大和の國は、この日本の國の中心にあたるのであるから、我が國の堅い土臺を築くことが出来るであらうからそこに都をうつしたいと思ふがどうであらう」

一同は天皇の仰せに賛成し、これから御出發の用意がなされました。

此の御出發こそは、我が大日本帝國の基がます／＼かたくなつて、いよく立派に開られてゆくといふ最も目出度い門出であります。

神武天皇を御中心に皇族全部、群臣達をあげての大行軍であります。

途中にはいたるところにまだ悪者共がたくさん居て、皇軍に叛いてゐます。當時はまだ立派な船もなく、航路も定つてゐません。

この中を進んで行かふと云ふのですから、なか／＼大變なことであります。

日向を發して、四國と九州の間である、速吸の門をすぎ、豊國の宇沙へおつきになりました。こゝで暫く足を止められ、更に筑紫の岡田宮に御止まりになり、其の附近の悪者共を従えさせられ、東して安藝の多邪理宮におつきなり、附近を平らげ、充分に戦の準備をととのへて、海上を瀬戸内海に向かつて、お進みになり、やう／＼にして浪速におつきになりました。

この間、實に六年といふながい年月がたつてゐるのであります。

何しろ當時は道もわるく、交通も不便で、軍用の品をととのへたり、これを運んだ



圖路順征東御皇天武神

りするのに、どんなに困難であつたかわかりません、その上途中の悪者を征伐したり亂れた國を鎮められながら行くのですから、容易なことではありません。

しかもこれから更に頑敵を打ちましたがへやうといふのです。その御困苦、その御苦心、考へただけでも恐懼の極であります。

大和に都を移す

目ざす大和の國には頑敵長髓彦が威を振つてゐます。長髓彦は同じ天神の子孫である饒速日命といふ方を奉じてゐました。饒速日命こそは正しく天神の子孫であるから、この國を治めらるべき方であると信じてゐます。

人民達も深くそう思つてゐます。そこに神武天皇がお出でになつたのですから、びつくりいたしました。びつくりするよりは怒つてしまひました。何と云つても他の人を一步も大和に入れまいと、偉い元氣で戦つたのです。

誤つた信念はおそろしいことです。流石の天皇軍もなか／＼前進することが出来ま

せん。

三〇

一方は勝手知つた土地の住人です。天皇軍ははじめての地形です。御兄君五瀬尊も尊い犠牲となつて斃れました。戦はなか／＼好轉しません。

神武天皇は一番険しい紀伊の山中に道を轉じて、長髓彦軍と戦ふことにいたしました。そして天皇は饒速日命に、天照大神の御神勅と、大義名分といふことをおさとしになる使を出しました。

命は、この尊い勅使に接して、はじめて戦争の意義もわかり、長髓彦を諭して降服するやうすゝめたのでしたが、この頃にはもうきゝいれませんが、仕方なく命は長髓彦の首を切つて、天皇軍に降伏したのであります。

巨賊長髓彦を征伐してしまへばあとはぞく／＼と従つて來ます。叛いたものもかんとんに亡びてしまひます。

だがこの戦は實に困苦を極めたものでした。時には皆さんのよく知つてゐられる様

に八咫鳥があらはれて道案内をしたこともあり、金の鶏が飛びきたつて靈妙なる神助を示したこともありました。實に神靈の加護が大きいものであります。

しかし目出度く征伐も終つて、こゝに天皇は即位の儀式をはじめて莊嚴にあげられることゝなりました。

八紘一宇の聖勅

六ヶ年餘の御聖戦の結果、完く悪者共を征伐し盡す事が出來ました。誤れる考を持つ人達の考へ方を正しく導くことも出來ました。

長期建設といふ言葉が現在使はれてゐます。神武天皇のなされた御聖業は、まさしく長期建設でありました。そして天皇の御惠によつて、國內が明るく、美しくたてなほされました。今まで、長髓彦の手下になつてゐた者共も、この御惠に浴して、世が明けた思ひでありました。心からなる深い喜びと、幸福を感じて、天皇の氣高く、尊い御姿を拜むことが出来るやうになりました。

美しい平和な朝がおとづれたのです。國中によろこびが満ちあふれてゐます。天皇はかうして、新にお着きになりました大和の地に都をつくられて、はじめて御位につくことになりました。

大御代が明けたのです。

雲にそびゆる高千穂の

高根おろしに草も木も

なびきふしけん大御世を

仰ぐ今日こそ樂しけれ

海原なせる壇安の

池の面より猶ひろき

惠の波に浴みし世を

仰ぐ今日こそ樂しけれ

天つ日嗣の高みくら

千代萬代に動きなき

基定めしそのかみを

仰ぐけふこそ樂しけれ

空に輝く日の本の

萬の國にたぐひなき

國のみはしらたてし世を

仰ぐ今日こそたのしけれ

愈々天皇は御位に即かせられることになりました。新に山林がぎりひらかれて櫃原の地に立派な御殿が建設されました。

天富命は一族諸神を率ひて、三種の神器を正殿に奉安し、珠玉をかざり、幣物を

つらねて、奉仕して居ります。國々からの貢物が山の如くにつままれてあります。

饒速日命は矛や楯を立て、儀式を嚴にしてゐます。

道臣命は武士共を率ひて宮門を護衛してゐます。

その儀式のさかんなることはとても、筆や紙につくされません。天種子命先づ進み出でて、高らかに天神壽詞を奏します。ついで即位の大典がおごそかにあげられます。國民一齊の萬歳の聲は天地にひびかしました。

かくして天皇は人皇第一代の御位におごそかにつかれ給ふたのであります。

これより先、天皇は群臣を集められて勅を下されました。

勅語

當ニ、山林ヲ披拂キ、宮室ヲ經營シ、恭シク寶位ニ臨ミ、以テ、元々ヲ鎮ムベシ、上ハ、即チ乾靈授國ノ德ニ答ヘ、下ハ、則チ皇孫養正ノ心ヲ弘メン、然シテ後ニ、六合ヲ兼ネテ、都ヲ開キ、八紘ヲ掩ヒテ、宇ト爲スベシ。

これから山林をひらいて、御殿をつくり、神々を祭つて、おごそかに天皇の御位について、人民を安らかに治めよう、そして、天照大神の御神勅の御心をひろめ、ますます國が榮えてゆく基にしよう。そして後には國中を都とし、天地を家となさうといふ、まことに雄大にして、さかんな大御心であります。

「寶祚の隆えまさんこと、まさに天壤と共に窮り無かるべし」

「六合を兼ねて、都を開き、八紘を掩ふて宇と爲すべし」

これが、我國の願であり、使命であるのです。これ以上の大きな考へ方が果たして、

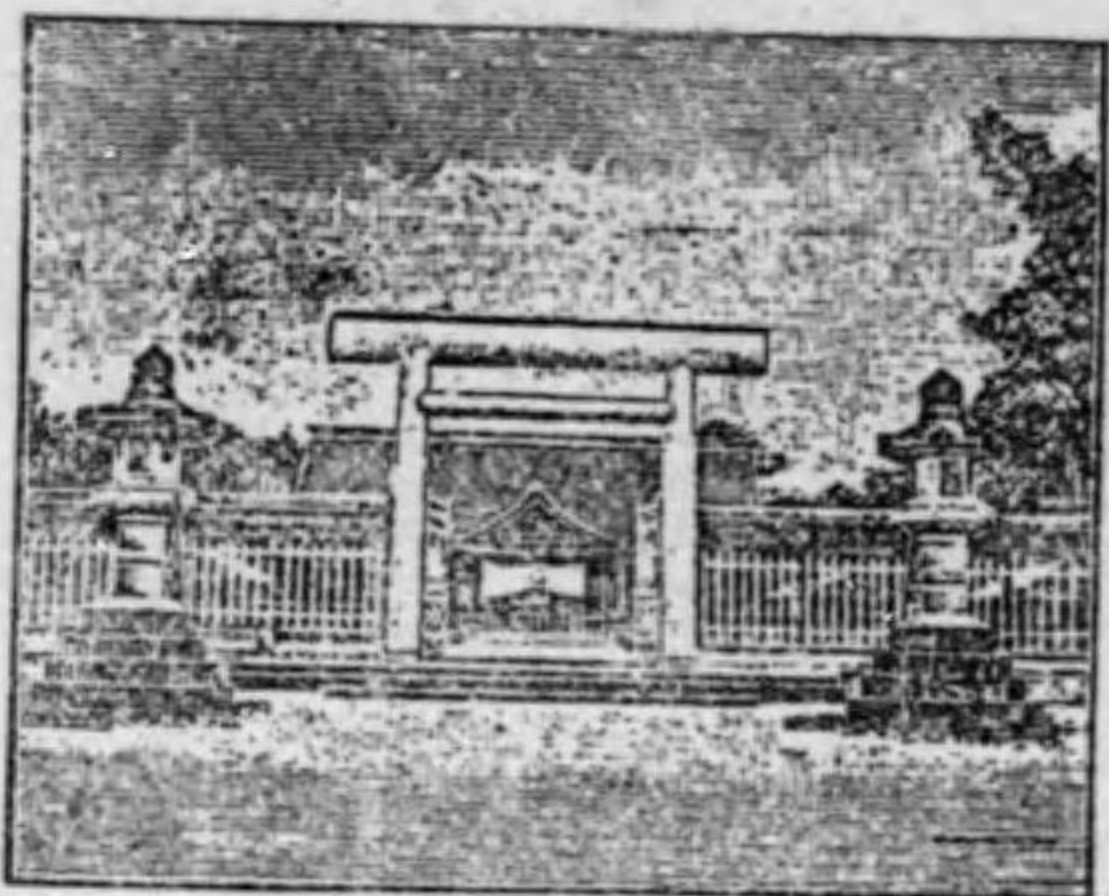
他にあることでせうか、「天地をもつて家となす」この大御心を學んで、私達が東亞の天地に、全世界に雄飛する時、はじめて、建國の大使命を果たすことが出来るのでありませう。

明治天皇御製

樞原のとほつみおやの宮柱

建てそめしより國はうごかず

神武天皇即位遊ばされて、すでに三千年、皇威はいよ／＼發揚されて、國力は充實し、人口は一億を突破してゐます。しかも世界中の人達は今どうしたら世の中がう



樞原神宮

まく治まつて、平和にすごせるのか全然わからなくなつて、迷つて居ります。

弱い者をいぢめて、自分だけ榮えようとか、中には世界中を荒し、亂してしまふなど、悪魔の様な考を持つ國々もあらはれてまいりました。

誰か救はねばなりません、世界は救ひの手をまつてゐるのです。
「光は東方から」世界中の人達が、またそう云ふことを口々に云ひ合ふやうになりました。

皇大神宮

明治天皇御製

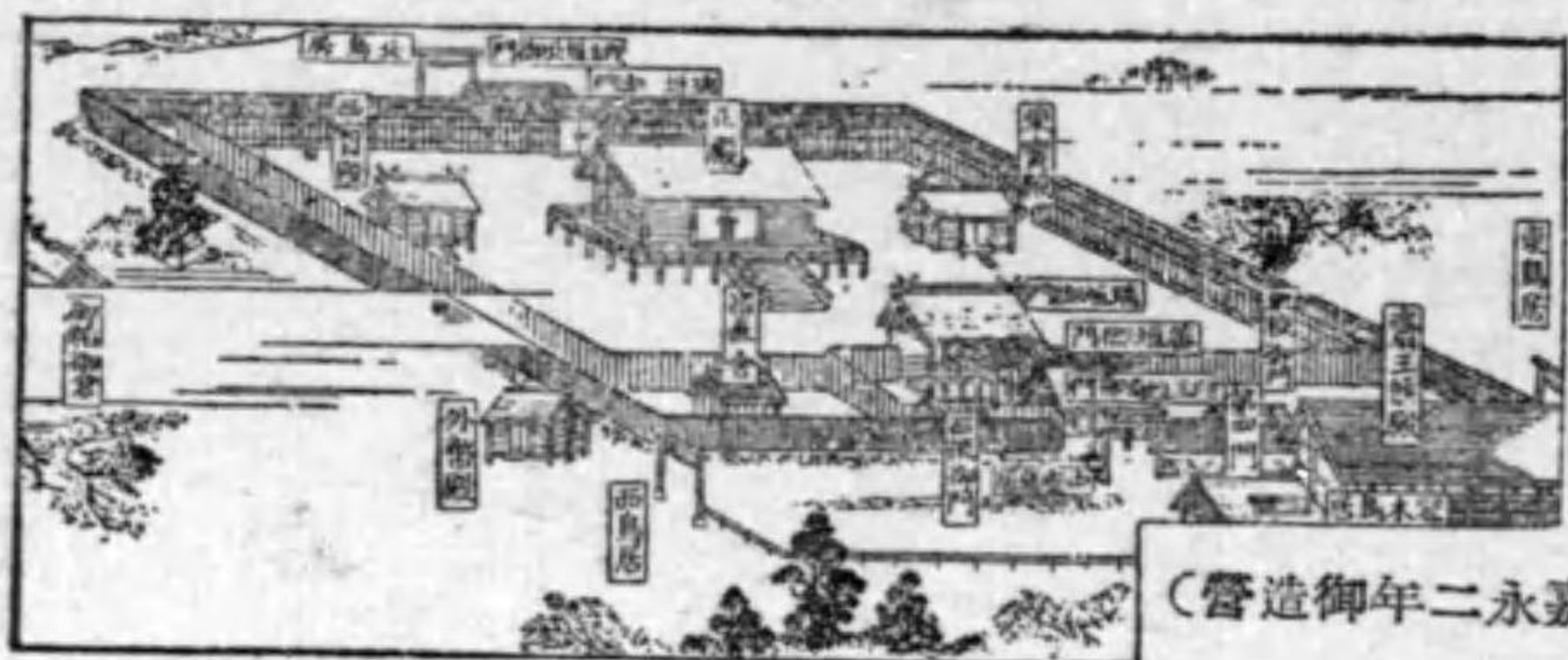
かみかぜの伊勢の内外のみやばしら

動かぬ國のしづめにぞたつ

動かぬ國のしづめにぞたつ、伊勢の皇大神宮は、皇室の御先祖であり、國民の御先祖であらせらるる大親様、天照大神をお祀りしてあるのであります。

御神體としては八咫鏡、これは親しく大神の御姿をうつしたものであり、皇孫瓊々杵尊に御授けになる時、

「この鏡をわれと思つて、常にあがめまつれ」と、仰せられたものであります。大神



(營造御年二永嘉)

皇大神宮

の御形見として、大神の御魂のこもり遊ばす尊いものであります。私共は三千年前の天照大神を、今そこに在ますが如く、拜することが出来るのは何といふ幸福なことでありませう。

明治天皇御製

久方のあめにのぼれるこちちして

いすずの宮にまゐるけふかな

この尊き宮居がどうして、こゝに建てられるやうになつたの宮でありますか。

明治天皇御製

昔より流たえせぬ五十鈴川

なほよろづよもすまむとぞ思ふ

「昔」とは何時頃でありませうか。

第十代の天皇に崇神天皇がおたちになりました。この時はもう神代を去る六百餘年になつてゐます。天皇は御尊神の御心が厚くまりましたので、今迄は三種の神器と共に天照大神を宮中におまつりしてございましたが、それをたいへんおそれおほくお考になりまた廣く國民にもいつきまつることが出来ます様にとの大御心から皇女豊鍬入姫命をして、神鏡と靈劍を奉じて倭の笠縫邑にまつらしめました。

そして、宮中には別に、神代に神鏡を鑄たりし石凝姝命の子孫に神鏡を模造せしめ、別に神劍を模造せしめたものと、神玉を留められて、おまつりすることになりました。

次の垂仁天皇の御代になつて、天照大神を倭姫命におまつりさせたのであります。

倭姫命は天照大神をおまつりする適當な場所を方々にたづねもとめました。はじめに、宇田篠幡に至り、近江國から、美濃、伊勢と探し求めてゐた時に、天照大神があらはれまして

「伊勢の國は、遠く海外から浪の打ちよせてくるところで、この海岸にたつと、海上の様子をよく見ることが出来てよいところである、こゝにしなさい」と告げられました。

即ち、大神はこゝが世界の中心であつて、こゝにゐれば世界の果てまで見きはめが出来ると仰せられたのであります。世界の國々がやがて、日本を中心として、ひとしく、朝貢してくると、云はれたのであります。

この一言の御神教をいたゞいただけでも、私達はあまりにも深遠なる日本の國の大使命と、我々の責任の重大なことに、心がしまる思がするではありませんか。

倭姫命は神教によつて、遂に伊勢國度會郡五十鈴川のほとりに神靈を鎮め奉ること

にいたしました。これが皇大神宮であります。

四〇

神域はまことに廣大幽靜で、老杉は日影を蔽ひ、五十鈴川の水はあくまでも清く、澄んで居ります。

明治天皇御製

さゞれ石の巖とならむ末までも

五十鈴の川の水はにごらじ

〇

昔より流れたえせぬ五十鈴川

なほよろづよもすまむとぞ思ふ

〇

かみかぜの伊勢の内のみやばしら

動かぬ國のしづめにぞたつ

四、神靈の子日本武

皇子親征

神武天皇の御恵に浴して、國內は平和に楽しく日々を送つて居りました。この後の代々の天皇も、天照大神の御心によつて人民をいつくしみ遊ばされたので、これからはよく國中も治つて、本當に幸福をたのしむことが出来ました。

ところが、第十二代景行天皇の御代になつて、九州の南部にゐた熊襲が叛きました。この地方は天孫皇臨以來、代々の御祖宗のいられたところでありましたが、神武天皇御東遷以來、皇化に遠去かつて居りました。

殊に南部に住んで居りました熊襲は、なか／＼猛々しい民族で、早くより朝鮮支那ともゆきゝがあり、盛なものでした。そこで遂に朝廷の御威光を輕んじ、熊襲の酋長は自分から王と云つて、しば／＼叛くのでありました。景行天皇はこの事を大變御心

配になり、御親ら親く御親征になり、その都度御惠を施していらつしやつたのであります。しかも熊襲は遂に皇化に浴する事が出来ず人民も安住する事が出来ない有様であります。

鴻恩無邊に馴れて、朝威を輕んずるのであります。どうしてもこの邊りで徹底的に討伐を加えて迷へる心を更生させなければならぬ時機となりました。武力もまた慈悲なのであります。この大使命貫行の大命が下つたのが、景行天皇の皇子小碓命なのであります。

この時、命は御歳僅かに十六歳の少年であらせられました。

金枝玉葉の尊き皇子様が、御若き身をもつて、遠く西國に派遣せらるゝことになつたのであります。お勇ましき事ながら、おそれおほきことであります。

勅命を拜して、威武堂々皇城を後に出で立つ、若き皇子様、今にして思ひ見るも壯嚴にして、恐懼のかぎりであります。

皇子の勇武

小碓尊は勅命を奉じて、熊襲の住む九州にやつてまいりますと、酋長川上梟師が、丁度新しく家をたて、祝事をやつてゐる眞最中でありました。

梟師の勢はなかく、たいしたもので、このお祝ひにも、一族の者共は勿論のこと、近くの酋長連が皆集つて盛んな酒盛をやつて居ります。

尊は討伐に派遣されたのでありますが、もとより皇化に浴せしむるのが目的であります。決して罪なき部下や住民に苦難をあたへるのが本望ではありません。戦はずして、降服せしむる事が出来れば、これが最上の策であります。

そこで尊は酒宴の様子を見て、「これはよい時」と、ばかり、たつた一人で勇敢にも、その席上に忍びこむことに決心いたしました。

忍びこむと云つても、そうたやすくは出来ませんから、酒宴の手傳にたくさんの女達が雇はれてきてゐる、その中にまぎれこんで行くことに決めました。

髪かみの毛を解とき、女の着物をつけ、すつかり女の姿になつて、酒宴の席にまんまとま
ぎれこんだのであります。

賊共は上機嫌じやうけんで酒を飲んで居ります。尊が出られて酒のお酌しやくをなさるのも、一寸氣
がつかずかへつて尊の美しいお姿を見て、梟師はよろこんで、自分の側近そはぢかくによびよ
せ、しきりに酒をあふつてゐる始末です。

その中に夜も次第に更けてきました。賊共はだん／＼と、その場に酔よひ倒たれてしま
ひます。

最後まで飲みつゞけて居た梟師も、たう／＼どろ／＼に酔よひつぶれてその場に高たか身み
でねてしまひました。あちらにも、こちらにも、恐ろしい顔をした賊共が眞赤まつかになつ
てごろ／＼と倒れてゐます。

「よし」

と、尊はかくし持つたる劍つるぎをざらりと抜くと、梟師の枕をぼんと蹴けりました。

「あつ！」

と、驚いて眼をひらいて梟師はとび起きました。

宵よひの中に酌しやくをしてゐた少女が、劍を抜いて枕元まくらもとに立つて
ゐるではありません。

「おのれ、不届者ふとどきもの」

と、飛びかゝらんとしたところを、すばやく組み伏せて尊
はしつかとおさへつけました。その力の強い事、ぐん／＼
しめつける強さ、強力自慢きんりよくじまんであつた流石さすがの梟師も、どうに
もなりません。息がつまりさうです。

物音ものおとに賊共は一齊せいに眼を覺さまして、これも驚きました。

若い少女に押さへつけられて、ふだんから自分たちがおそれてゐた梟師が動くことも
出来ないであります。あまりの不思議な様子に酔よひも一時に覺さめはて、たゞ眼をみ



はつてゐるばかりです。

「お待ち下さい、しばらくお待ち下さい」

苦しい息の下から梟師は叫びました。

「一體あなたはどなた様でござります」

「我こそは天皇の皇子、小碓尊、汝都を遠くはなれて人民を苦しめ居るにより、勅命によつて征伐にむかつたのだ」

少しもおそれるところなく、きつぱりと仰せられた様は、實にけだかく雄々しいものでした。

「皇子様！」

さすがの梟師も、もう恐れいつて手向ふ様子もありません。

「私は世の中で、自分が一番強いと思つて居りました、そして悪いこともたくさんしてきました。だが私は今はじめて、朝廷の御威光を知りました。今までの天罰です、

喜んで、お強い皇子様の刃で死んでゆきませう、たゞ死ぬるにあたつてたつた一つ

お願いがあります、どうぞ皇子様これからは、日本武とおなのり下さいませ」

そういつて殺されました。他の賊はすつかりおそれおのゝきあらそつて、皇子に降参をしてきましたので、まったく、熊襲は平定してしまひました。

そこで尊は一同を集めて、皇恩のかたじけなさを説き聞かせ、天子様は決して征伐しやうと思召されてゐるのではない、人民が幸福に楽しく生活出来るやうに願つてゐるのであることを知らせましたので、熊襲達は、はじめて、本當に平和な幸福の生活のしかたがあつた事に目覺めて、心から喜び、忠誠を誓ふ様になりました。お目出度いかぎりであります。

蠻族蝦夷

小碓尊、日本武尊とお名乗り遊ばして、目出度く御凱旋なさつてから、凡そ十二年程して、こんどは東國の蝦夷といふ種族がはびこつて、次第に勢をつくり數多の良民

を苦しめるやうになりました。

蝦夷といふのは、今北海道や樺太に住んでゐるアイヌの先祖の事であります。今のアイヌは大變にやさしくて正直であるが、昔の蝦夷は實に野蠻でありました。男も女も共に入墨がしてあつて、猛々しい風をよそほひ、冬は穴の中に住み、夏は森の中や林の中に寝おきし、常に鳥獸をとつて其の血を飲み、肉を食とし、はいだ毛皮を身にまとふといふ有様で、お互に禮儀も作法もあつたものではない。恩をうけてもありがたいと思はぬが、一旦怨を見ては、必ず仇を報いる。常に弓矢、刀槍の様な武器を持つてゐて、争ふことが多く、時には親子、兄弟の間といへども殺し合ひが始まるのも珍らしいことではなく、良い百姓の家を侵して財寶をうばつていつたりして悪事を働き、攻めようとすればすぐに山に入つたり、草むらにかくれたりする、その逃げかくれの早いのは鳥獸といへども及ばぬ位でありました。今の支那の匪賊よりもやつかしいものでありました。

この蝦夷が叛いたのです。この蝦夷追討の天命が未だ熊襲征伐の疲れの十分に回復もされない日本武尊に再び降下されました。否進んで尊から天業恢弘、皇運扶翼の大業を希望されたのであります。

まことに尊こそは日本人の鑑と申さねばなりません。天皇も深く尊を御信頼遊ばされて居りまして、出征に先きだち

「つくぐとお前の様子を見るのに、まことにしつかりしてゐて姿も美しく尊く、力は人一倍強く、戦争の方法もすぐれてうまい。向ふ所敵なく、攻めれば必ず勝つ、お前は形は私の子供として生れてゐるが、實は神人である。神が天業を經綸し、平和な國をつくるために生れ代つて來たものであると信ずる。」

と、仰せられてゐます。父君であらせらるゝ天皇の御言葉ですから、これだけから考へて見ても、日本武尊がどんな方であり、天皇がどれ程に御信頼されてゐたかといふことがよく想像されます。討伐の方法としては、

「武をもつて之を示し、徳をもつて之を懐け、兵甲を煩はさずして、自から臣順せしめよ」

と、仰せられてゐます。

これが我國の戦争の意義なのであります。

蝦夷征討

尊はまづ伊勢の皇太神宮に參拜せられて、勝利をお祈りになりました。この時御叔母の倭姫命は天叢雲劍と御囊とを授けられて、「これをお持ちになる様との大神の御告げであります」と教へられました。

尊は大そうお喜になり軍を進めて、駿河にお出になりました。この時この地方の土賊どもは伴り降つて、尊に鹿狩をお勧めし、その事によせて、尊を野原にお誘出し、不意に四方から火を放ちました。

尊は少しも騒がずに叔母の命から頂いた御囊から火燧を出して火を切り、向火をつ

けて逆に賊をお焼きになりました。この時神劍も自から抜けて傍の草を薙ぎ拂つたので、尊は幸に御無事で、賊共はかへつて敗北いたしました。是によつて神劍は名

を草薙劍と申上げる様になりました。

尊は更に進んで、相模にお出になり、海を越して上總へお渡りにならうとした時、不意に海が荒れ波風立騒いで、御船もあやふく見えませんでした。

この時御妃の弟橘姫は尊の身代りとして千尋の底にお沈みになり風波も収まつて、無事尊は上總に上陸なさいました。



これから更に常陸の國から火高見の國まで追討遊ばされて、まつたく蝦夷を征服せしめることに成功いたしました。そこで歸途につかれましたが伊吹山の賊を討伐なさる途中おしいことに病歿されてしまひました。

日本武尊はお若い時から殆んど休む暇もない程な多忙の一生涯をおすごしになられました。しかもその全生涯を天皇の爲に御國の爲に捧げられました。

常に天業恢弘の第一線にお立ちになり、少しも身の危険を顧なかつたのであります。

神武天皇が我帝國の基をかたくされて以來凡七百五十年、代々の天皇の御徳と人民たちの骨折りによつて、皇室の御威光は四方に伸びひろがつたのであります。しかし大和を遠く離れた國々には、まだいろ／＼の蠻人が残つてゐて、國々をさわがしてゐました。

この蠻人共をしづめて、皇化に浴せしむることに、代々の天皇は非常に御心を悩まされて居りました。この七百年來の宿題を立派に解かれたのが十六歳の皇子日本武尊でありました。

西に、東に、勅命をたゞかしくみて、一意専心、奉公遊ばされました。御后弟橘姫は尊の勅命を立派に果たす事を祈つて御身代りに相模の沖に身を沈めさせられました。

この盡忠至誠の御徳になびかぬ賊とはありよう筈がありません。至るところ皇恩無窮の光に導かれて行つたのであります。

かくして七百年來の宿題を解き終つて、偉勳赫々、なつかしの都に御歸京遊ばす途中急逝遊ばされてしまつたのであります。

まことに尊は全生命を御國の爲に捧げさせ給ふ爲に生れ給ふたと云つてもよろしいのであります。

これを思ふ時、國民は皇猷を翼賛し、皇運を扶持し奉るといふが、金枝玉葉の尊の廣大無邊の御働きに比べれば、百分の一にも千分の一にも足らないのであります。

尊こそは正しく國民の鑑であり、皇國の守護神と申すべきであります。

「汝は神人」「この國は汝の國」と御父君が御信頼を寄せられた尊は、御勳功を物語

ることもなく、皇位くわうゐにもものぼらせらるることもなく、大和やまとと近き伊勢いせの能煩野のぼらので三十年、苦闘くたうの一生を終つたのであります。

五四

しかしその御聖魂はとこしへに地上に留まられて皇國をまもられてゐるのであります。

五、日本と大陸

日本人は大陸民族

日本は島國であつて、大陸との關係がなかつたやうに考へる者が少なくありませんが決してそんな事はないのであります。

日本が島國としての生活を始めたのは明治になる前の江戸時代三百年程の間であります。これが最近さいきんなことですから、遂日本は島國として大陸との交通かうたうがなかつた様に考へやすいのです。

古代に於てはむしろ活潑くわつぱつに大陸との交通があつたのであります。

神代に於て、天照大神あまてらすおほみかみの弟月讀尊おとづとつきよみのみことの經略けいりやくし給へる地は朝鮮半島てうせんはんとうであつたのであります。

素戔嗚尊すさのをのみことも、しばし朝鮮に行かれてゐますし、神武天皇じんむてんのうの御代みよには稻永尊いなながのみことが朝鮮に行かれて國王になつてゐたのであります。

朝鮮と日本は神代かみよに於てはまつたく一つの國でありました。

神功皇后の使命

神功皇后じんぐうくわうごうの御先祖あめのひぼこ、天日槍あまのひらこは新羅王しらぎわうでありましたが、國を弟に授けて日本に歸化したものであります。この様に大陸から日本にたくさんやつて來てゐるし、こちらからも亦大陸に渡つて、お互たがひに密接みつせつな交通かうたうがありました。

大海を渡つてゆくのでありますから、神代の時代にあつては容易やういの術すべでありませんでしたが、勇敢ゆうかんなる古代人は、この大海も大海と思はずに元氣で渡つてゐたのであり

ます。

それが朝廷との間で直接に大陸との交通が盛でなくなつたのは内地を整へるのに主力を注がれたからであります。天業を恢弘するにはどうしても内地を立派に整へるといふことから始めなくてはなりません。

神武天皇御東遷以來、朝廷では全力を注いで内治にのため盡されました。

しかしその間とて、決して大陸との交通が絶えてゐたといふのではありません。

崇神天皇の大陸經營

崇神天皇の御代には朝鮮の使が見えて、朝鮮の國が兵亂ばかりつゞいて、うまく治まることが出来ないから、天皇の御威光で治めて貰ひたいと云つてきました。

そこで天皇は御間城入彦と申上げましたので御名の御間城をおとりになり、任那とつけられ、將軍摠乘津彦をつかはして、日本府の役所を設けて治めさせられたのであ

ります。

人民の中には更に支那と交通をして居り、九州地方の住民には我朝廷よりは支那の國王に近づく者すら出て来たこともあります。

熊襲が時々朝廷に叛き奉つたのも、まつたく彼等が、支那朝鮮と通じて、その助を借りたからに別ならなかつたのであります。

したがつて、蝦夷、熊襲が皇化に浴し、内政が整へば、當然古代の如く、大陸も御稜威をもつて、經營させらる様になるべきであります。この國內統一の大事業を貫徹させられ、再び大陸經營に乗り出すべく功績のあらせられた方が日本武尊であります。

たゞ惜しむらくは尊は急逝されて、この大陸經營までに成功いたしませんでしたが、若し尊が今十年在世あらせられたらんには、必ずや大陸にも輝かしき天業恢弘の

大仕事を完成されたのに違ひありません。

五八

國內統一だけでもまことに深き鴻業であらせられたのでありますが、あまりに、おわかくして薨去された事は、畏れおほい事ながら、残念の次第に思ひます。しかし、尊の意志は御子仲哀天皇によつて繼承され、更に仲哀天皇の皇后神功皇后によつて實現されたのであります。

六、大陸 經營

仲哀天皇の 大志

神代の古代より大陸經營の大業を行はせられて居つたのでありますでしたが、その後内政整備に専心されて大陸の事はしばらく斷念されてあります。しかし日本武尊の功績により内地の經營は整ひ、帝國の基礎は鞏固になりましたので、いよ／＼海外に皇威を振張せしむべき時機となりました。

仲哀天皇は、即位の始よりこの御志をたてられ、海外の事情に通ぜる家より皇后を立てられたのであります。

したがつて、天日槍の子孫神功皇后の入内は皇威を海外に宣揚せしむべき大御心のあらはれであり、皇后の責務も亦こゝにあつたのであります。

また總明にましました神功皇后は、よくこの御聖慮を體し、入内の大使命を立派に遂行したのでもあります。

敦賀の 行宮

天皇は即位のはじめ大陸經營に便なる地を求めて、越前國敦賀に行宮を定められ、遙に大陸を望んで準備あらせられてゐました。

しかるに、この時熊襲再び叛きて良民を苦しめました。そこで天皇は直ちに軍を進められて筑前國に大本營を定められました。

天皇はこゝに行宮をつくり熊襲をおさへられて、一方更に海外に進軍なさらうとい

五九

たしましたのですが、惜しいかな、陣中に崩御あらせられてしまいました。

天皇親しく肇國の大精神を體して征討の第一線に上御一人の尊き御身を進められ、遂に陣中に崩御あらせられたるは、恐懼のかぎりであります。御父君日本武尊と父子二代天業に一身を捧げて、陣中に歿せられ給ふ、皇國道の尊き體現者であらせられます。

三韓征伐略圖



萬世仰ぎ見れば、赫々たる御聖影、太陽の如く尊く、明らかく拜される次第であります。

願れば、今日、再び皇威大陸に宣揚の秋であります。日本武尊御父子の御聖行を仰ぎ拜する時、我々臣民はたとへ、身を粉にするも、なほその千萬分の一にも足らざるをおぼへて、畏れおほく感んずるのであります。

三韓征伐

將に、國家大非常時に際して、大帝神去り給ふ。國運の一大危機と申すべきであります。

されど英明にまします皇后は、この大なる悲しみを胸に秘めて、男々しくもすつくと立ち上らせられました。

國運を双肩に擔はせられて、皇后はよく時難を克服せられました。

即ち如何にしても、天皇の御志を實現せんものと固く決心遊ばされ、しばらく天皇の崩御を秘して、直ちに熊襲の後押しをする朝鮮討伐の軍を起すことにいたしました。

皇后は熊襲の叛くのは朝鮮の後押しがあるからであり、この後押しを討伐せしめてしまへば必ず熊襲も平らぎ、合せて大陸經營の大業も實現出來ると思はれたのであります。

天皇崩御の大事を秘して軍中味方の兵氣のおとろへるをおさへ一方熊襲を討たしめつゝ、朝鮮を討たうといふ、まことに偉大なるはかりごとであります。未曾有の大事業であります。そこで先づ皇后は天神地祇の教をうけることにいたしました。香椎の海邊にお出なになつて、御髪をお解きになり、海水に浸し

「若し神のお助けがあるならば、どうぞ髪の毛を二つになる様にお願ひいたします」と、お祈りになりました。すると御髪は忽ちに二つに分かれましたから、皇后は非常にお喜びになり、分かれたまゝの髪を、そのまゝ結んで男の様なみづらとし、群臣をあつめて

「吾れ女の身をもつて、かりに男の姿となり、上は神々の助をかり、下は汝等の力によつて、出征しやうと思ふ、うまく事が成れば、汝等の功となし、失敗すれば我一人の罪となすであらう」

かたい決心をお示しになりました。そこで忠臣竹内宿禰はじめ一同は感涙にむせび、

「皇后は今天下の爲にこの大事を遊ばさるゝに、私共はどうして一生懸命にならずに居られませう。おさとしの程よく守りまして、命のあらんかぎり國の爲につくしませう」

とお答へ申し上げました。

そこで皇后は諸國に令して、船を作らせ、兵を集め、威风堂々として、新羅にお向ひになりました。風神海神が其皇軍をお助け申して、數百の兵船は帆に順風をはらみ、艫楫を用ひずして、新羅に到着せられました。御船に隨つて、大波が立ち上り、新羅の國內に漲り渡つたので、國王は大に恐れ、臣下を集めて

「昔から未だかつてかゝる例がない、これは此の世の限りになつて國が海となるのであらう」

と、嘆き悲しみました。ところがやがて兵船が海に満ち、鼓の聲が山を動して來たので、國王は更に群臣を集めて

「東の方には日本といふ神國があつて、天皇といふ、すぐれた方がお出になるときいてゐる、今我が海邊に來たのは、必ず日本の神兵であらう、どうして手向ひが出来るものか」

と、いつて、皇后の御船の前にまゐつて、

「今より長く、勅に従ひ奉り、年毎に貢物を奉ります。たとひ太陽が、西より上ることがあらうとも、川の水が逆に流れることがあらうとも決して叛きません」と、申上げて、降参を願ひ出ました。皇后はその願ひをお許しになり、多くの献上品を收めて、目出度く凱旋遊ばされました。かくて次々に朝鮮中の國々が屬國を申込んできましたから、自然に熊襲も叛かぬ様になり、一兵に血ぬらずして大陸經營に成功いたしましたのであります。まことに偉業として讃へ申すべき言葉もない程であります。

三韓を經營す

朝鮮が我國の屬國となる様になり、朝廷が大陸を經營をする様になつてから、我國

内の様子もたいへんに面目が更つてきました。

朝鮮は上古から支那の文明の影響を受けて學問技藝が頗る進歩して居りました。したがつて、朝鮮が屬國となつてからは、この進歩した學問、藝術がぞくぞくと輸入されて來て大いに、我が文物の進歩をたすけたのであります。

應神天皇の御代には阿直岐や王仁といふ學者が、支那の學問を傳へ、つゞいて支那人や朝鮮人が、何千人といふ程歸化してきて、それ／＼の技藝を傳へましたから世の中の様子がすつかりかはつてしまひました。

今から千七八百年の昔の事でありませぬ。

思へば神功皇后はまことに、我歴史上の一大偉人と申さねばなりません。第一期大陸日本の建設者であります。

大陸人の移住

我が皇室の御精神は決して他民族を征服し獨り大和民族だけが榮へようといふので

はないのであります。八紘一字とか四海同胞といふ言葉が示してゐる様に、總べての人を一軒の家の家族の様にして、互に相親しみ、幸福に暮らさせたいといふ御慈悲が、我が皇室の尊く、有難ひ、願なのであります。

現在我が皇軍が聖勅を奉じて大陸に出兵してゐるのも、決して、かつての歐洲人がアフリカや濠洲、印度を侵略して行つたのとは根本的に違ふのであります。

天皇陛下の御稜威によつて、全東洋人を抱擁なされて、幸福にさせたいといふのであります。ところが、なか／＼に支那人やヨーロッパ人はこの御慈悲が判らないのであります。

したがつて、今事變といふのは、私達の血の犠牲によつて、皇室の御慈悲を世界中に知らせひろめ、世界中の人を救ふといふ尊い聖戦なのであります。

古代の大陸人も一度、我皇室の御慈光に觸れると驚喜感激して生れ故郷に歸るようななつかしみを抱いて、ぞく／＼と移住して來ました。そして無數の人達に對しても

皇室は等しく、大和民族と何の隔てもなくお慈悲を垂れさせ、我々の先祖も御聖旨を奉體して、仲よく、むつまじく暮し合ひましたので、何時のまにか、彼等もすつかり、我々と同じ民族のようになつてしまひ、今では決して見分けがつかない程になりました。

大陸から皇室の御徳を慕つて歸化して來たのは太古の昔からたくさんあつたのですが、殊に神功皇后の三韓征伐以後は盛になりました。

しかもこの時代の歸化人の中にはそれ／＼一藝一能に秀でてゐた立派な人達が多く、我が國の文化を進めるに骨を折つたのであります。日本を慕つて厄介になり來たではありません、日本のお役に立ちたいと望んでやつて來たのであります。こんな美しい歴史がどこの國にあつたことせう。

畏れ多くも神功皇后も歸化人の御子孫であらせられ、有名な調伊企灘や、坂上田村麻呂の如きも歸化人の子孫であつて、ながく我々のお手本とさえなつてゐるのであ

ります。

應神天皇の御代にはかうした歸化人が特に多數ありました。

その主要なものをあげて見ると、

應仁天皇七年九月 高麗人百濟人新羅人任那人大舉來航、歸化記念に韓人池をつくる。

十四年二月 縫衣工女眞毛津等來航歸化

十五年八月 百濟王族阿直岐一族歸化

十六年八月 支那秦王族弓月君百二十縣の民を率ひて歸化

二十年 漢人阿知使主十七縣の人民と共に歸化

その他多數に歸化して來たのであります。人數にしたら、おそらく何萬といふ程でせう。聖徳を慕ひ、ぞく／＼と歸化し、日本國中にひろまつて住んでゐました。そして彼等は皆日本人に同化され、幸福な日をくらしたのであります。實にさかんな民族

融合の實をあげたのであります。

帝は先づ民族の融合を計り、進んで新文化建設の大業に着手されたのであります。

儒教傳來

神功皇后三韓に御親征遊ばされて、既に新文化の建設に心をお用ひになりました。即ち新羅の寶庫に書物の多數あるを御覽になり、全部朝廷に收められてお持ちかへりになつたのであります。

つゞいて應神天皇の御代に、儒教の學者であるところの阿直岐、王仁などの人達が渡來して參りました。儒教の普及に力をそゝぎました。

儒教といふのは支那の孔子が大成された教で、仁を中心に孝、忠を説いた立派な教であります。これが日本古來からの忠孝の教に似て居りましたから、支那よりも日本にひろく普及されるやうになりました。

天皇御親ら御講義を聞召され、皇太子、皇子にも學ばしめて、新文化建設の範を示

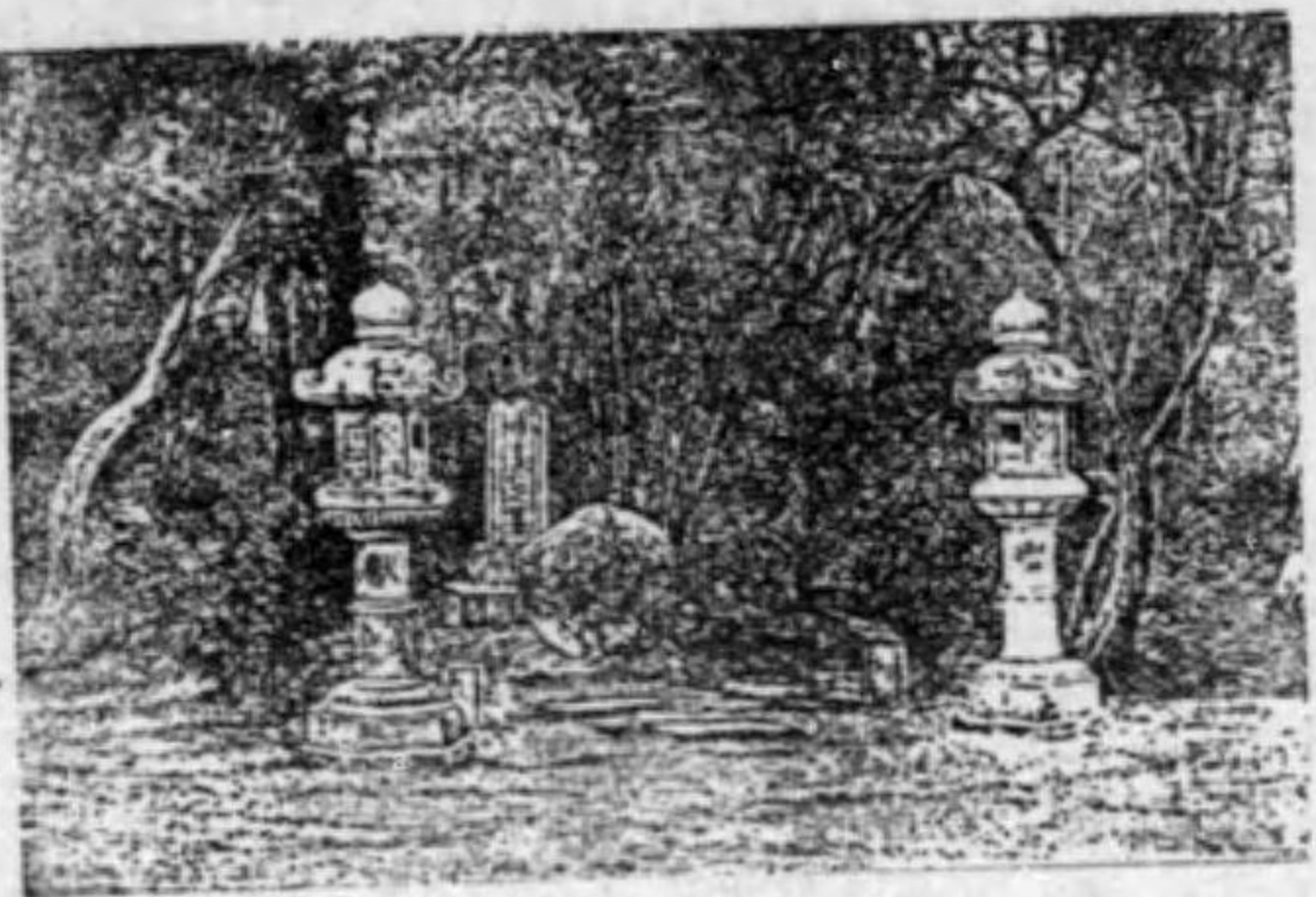
され給ふたので、ひろく、支那の學問を研究する者も現れて来て、儒教が盛になると共に、次第と日支文化の融合が行はれ、我が國の面目が一新されてきました。

美術工藝の進歩

日本の大陸經營、或は外國文化に對しての態度は、常に融和といふ考へ方であります。

「よきをとり、あしきを捨てる」といふのが我皇室の深遠なる態度であります。

他民族に對しても、征服をするといふ態度は決してとらなかつたのであります。他民族が皇化を慕つてやつて来た場合も、その民族の長所をとりいれて、日本文化の建設の爲にやくだて、そして、その民族をも皇化にうるほさせて立派に生きる様になさつたのであります。



王 仁 の 墓

應仁天皇は大陸の學問をいれられて、日本の新文化を建設する爲に非常なる御努力を遊ばすと同時に、美術工藝の方面にもお力を御注ぎになりました。

實に應仁天皇は日本最初の大文化を築かれる基をひらかれた、實に英明にまします大帝であらせられました。

大帝は、たゞ朝鮮の文物を輸入するにとどまらず、遠く支那の地からも、それ／＼美術工藝に秀でたる者をお召しになつて、日本の新文化建設に盡されたのであります。大帝がこの大業遂行に當つて、まことに廣大なる御心をもつてなされたといふことを一つのお話によつていたしませう。

この頃、支那では有名な萬里の長城を築かれた強國秦も遂に亡びて、その子孫の弓月君が百二十縣の民を率ひて、大變に困つてゐました、このことを聞かせられた天皇はまことにあはれなことであるとお考へになり、弓月君と共に百二十縣の人民を日本に来て住む様に御取計ひになりました。この亡國の君並に亡國の民は、故郷を追

はれて、ながく苦しんでゐましたが、はじめて聖恩に浴し、一同感激して歸化することになつたのであります。ところが途中で、新羅人に拒まれて來ることが出來なくなつてしまひました。この様子を御覽になると特に天皇は精兵をつけた特使を新羅に御遣しになり無事、日本に來住せしめたのであります。

弓月君を始め一同はどんなに喜んだこととせう、この人達の中には養蠶、織物の方面にすぐれた者が多かつたので、織物といふ意のはたと云ふ姓をたまつて、御愛撫なされたのであります。したがつてこの人たち自身は幸福に暮すことが出来る様になつたと同時に、日本の工藝の進歩に貢献することが多かつたのであります。これから後も代々、支那の亡國の人達を憐み、そのもつ文化の力を重く用られて、幸福に日本で一生を終ると共に、日本の文物の進歩に力をつくす大陸人がたくさんあります。

この様にして、この時代の美術工藝は大陸のものを加えて、著しく進歩いたしました。

そして、遂には世界に比類ない飛鳥時代文化と云ふものを築き上げました。

佛 教 傳 來

日本が朝鮮半島を經營する様になつてから皇室では大陸文化とを融合した、新なる文化を日本の爲にも、世界文化の爲にもなすとげやう、それが日本人のためであり大陸人の爲であり、延いては世界文明の爲であるといふ大御心から、あらゆる文化をどし／＼と御取入れになりました。

朝鮮文化、支那文化、そして遂には印度文化まで取入れられる事になつたのであります。

その印度文化としては、佛教と佛教文化であります。

先に儒教をいれ、またしても佛教を入れると云ふのですからなか／＼大變な問題であります。

佛教と云ふのは、日本と大變様子の變つた印度の地に今から大體二千五百年程以前

に現はれた釋迦が説いた教です。

その當時印度は非常に腐敗した、道のすたれた世の中でしたこの道のすたれた世の中を救ふ爲に説かれたのが、この釋迦の佛教であります。立派な教ではあるのですが、大體が亂れた不幸な世の人達を救ふ目的で説かれたもので、一寸日本の様なところには不似合な教であります。しかし教そのものは立派なものでしたから、印度から支那に入り、朝鮮を通つて、遂に日本に迄やつてくることになりました。

紀元一二二年欽明天皇の御代に百濟王が佛像と經文とを献上してきました。

天皇は、まだ支那文明と、日本文明が十分に融合しきれないところでしたから、流石に佛教の立派な教であることには、お喜びになられたのでしたが、國民が一時に色々なものに遭遇して、果たして、立派にこなしきれるか、どうか、といふことを心配なされて、群臣を召され、御相談なされることになりました。

群臣達の間に於ても、容易にこの問題は定められませんでした。

武内宿彌の子孫である大臣蘇我稻目は、先祖代々大陸の事に對して研究をして、ゐましたから

「外國で立派な教であるといつて、信仰してゐるものは、日本でも是非いれて、研究されて、決して、さしつかへがないと思ひます」

と、奏上し、大連の物部尾興は

「いや、そうなんでも、かんでも、外國のものを、無暗と入れてはならない。殊に佛教は、佛と云つて外國の神を拜むものであるから、この教を入れると、日本の昔からの先祖を崇拜するといふことや、神を敬ふといふことと、混亂してしまつて、必ずよい事はない、そうしたものはしばらく、入れない方が適當と思ひます」

と、進歩的な考を持つた蘇我氏と保守的な物部氏とが反對の返事を申上げました。

これから、この新しい考を持つ蘇我氏と、古い考を持つ物部氏とが、事々に反對な立場をとつて、遂には古い考を持つ物部氏といふものは亡びてしまふことになりました

す。

天皇は、蘇我氏の云ふことも、物部氏の考も、共に正しいとお思ひになり、そこで一應蘇我氏一派には

「お前達で充分に研究せよ」

と、お仰になり、佛像と經文をお下しになりました。

後に英明にまします聖徳太子の現はれ給ふや、太子は、

「我が日本民族は、あらゆるものを立派に消化しきる優秀なる素質をもつたる民族であり、また日本の使命として、あらゆるものを抱擁し、消化し、そこに新しい文化を築く大切なものがあるのである」

と、いふ確固たる信念と、決心を持つて、御親ら深く佛教を研究なされ、海の如き深大なる御心を持つて、佛教を奨励なさることになりましたから、忽ちにして、全国に弘布されることになりました。



法隆寺

この廣大なる太子の御方針によつて、支那、印度の諸文化が滔々として、日本に流れこみ日本人もよくこれを消化して、こゝに前古未曾有の立派なる新文化を建設することゝなりました。

飛鳥文化と云つて、現代のどの文化よりも進んだものを今から千二百年の昔に建設したのであります。

その名残りとして現在まで残つてゐるものに大和の法隆寺があります。

この法隆寺こそは木造建築でありながら、千數百年の間、幾多の天災地變にも亡びることなく、人類の至り得る最も美しき文化の面目

を世界に誇りつゝ今日に傳えてゐるのであります。

この建築の美しさには外國人といへども三嘆するのであります。

専門家の云ふことにはこの建築の様式の中にはギリシヤのものもあるといふことですから、世界中の最も優ぐれたるものを一つに集めたものといつてもよろしいこととせう。

千數百年前、我々の先祖が、かくも立派な大事業をなしとげたといふことは、限りなきわれ／＼の喜びであり、誇りであり、そこに我々のなさねばならぬ重大な使命を思はずにはおきません。

日本の表象聖徳太子

佛教傳來のところでも、お話いたしました様に、千數百年の昔に於て、聖徳太子は、實に我が日本の進むべき方向、日本の使命といふものを立派にお示しになりました。

朝鮮、支那、印度、遠くはギリシヤ文明までを抱擁して、遂に人類として至りつくる最高の文化を建設いたしましたのであります。



聖徳太子

何といふ、偉大なことでありませう。

現在、我日本は東亞新體制建設といふ大使命の前に立つてゐます。しかも、聖徳太子は千數百年の昔に於て、立派に、この大事業をなしとげて居られます。

太子は、即位なさらずして、世を去られました。今假りに太子をして、もう十年輝やかしき發展を示されたのではなからう

在世せしめたならば恐らく、政治的にも、かと惜しまれてなりません。

太子在御世中におかれましても、當時の支那の強大國隋と、堂々たる國交をなさつ

いへば大洋の如き大民族である。

千數百年前！我々の祖先は輝やかしき姿を私達の爲に残して呉れました。文化の程度も低かつた。

人口も少なかつた。

國富も決して豊でなかつた。

しかも、我々の先祖は他民族と接し、他國文化と觸れ、大陸を經營して、あだかも衆星の中の明月の如く、燦然たる光を散つてゐたといふことは、恐らく、外國人の常識から云へば、奇蹟だ、不思議だ、と云ふより別に云ふ言葉を持たないでせう。

支那文化を消化した。印度文化を消化した、歸化諸民族を消化した。この偉大なる抱擁性を、他のどの民族に見ることが出来るであらうか。

實に大和民族は大民族である。

世界人類の種々雑多の民族の中に、かうした大民族が存在してゐるといふことは、そ

も一體、如何なる使命の故であらうか。

私達は、祖國の歴史を回顧して見て、そこに、私達のなさねばならぬ、尊嚴なる使命を思はずにはいられません。

大和大民族

噫！大和大民族よ！

孔子は支那を救ふ爲に儒教を説いた。

しかし、一度として、孔子の教ふるが如き支那は實現しなかつた。孔子は、治國平天下の道を説いた。

國中が幸福になる様にといふ道を説いた。しかし、支那は現在に於いても、無限の富を抱いて、不幸の生活をしなければならぬ。

孔子の説いた教へた儒教はかへつて日本に於いて盛えた。

孔子は一生涯の中に、遂に名を聞くことさへ出来なかつた日本にその教がひろまり、盛になつた。

それは一體何故の事でせう。

日本は儒教がひろまる様な國だからである。

云ひかへれば、日本は道の國なのである。

建國以來、建國、國の始りそのもの自體すでに道によつて、なされてゐる。そこに正しい道が入つて来れば、當然に盛になるわけである。

つゞいて佛教が入つて来た。

佛教の發生地には、遂に佛教が榮えなかつた。支那、朝鮮にも盛になることが出来なかつた。

それが日本に来てのみ榮へた。

それだけに、日本は正しき者の、正しき教の榮へられる國なのである。

國のなりたちの故である。

國がらの故である。

思へば、また 尊嚴なる國體、

この國が、この民族が、われらなのだ。

我等は日本人なのだ、われ／＼は日本人なのだ、このよろこび、この感激！

あゝ偉なるかな祖國日本

あゝ美なるかな、大和大民族。

七、文化の華匂ふ

王朝時代

朝鮮文化を入れ、支那文化を採り、印度文化に接した、我々先祖は、しばらく大陸經營の大業を子孫の手に残して、靜かに氣を養ひ美的日本の建設を始めました。

大化の改新によつて、國內の體制を整へ。奈良に都を移して、優美限りなき都を築き、東山三十六峰誇らげに笑ふが如き平安に奠都してこゝに、美的日本の輝やかしき建設を遂げて、文學に、工藝に、建築に、彫刻に、美術に、宗教に、世界にも類なき文化を残して日本民族の優美性を無窮に誇りました。

私達は、世界に、武のすぐれた國を見ます。貿易、外交、文化にと、それ〴〵に於て、すぐれたる國を見ます。

しかし、日本程、あらゆる、すべての方面に優秀なる民族を遂に發見することが出来ません。

私達の先祖は時に、外國經營に、時に、文化の建設に、あらゆる角度と、あらゆる方面を子孫の爲に、ひらめかし、輝やかし、發揚させて呉れてゐます。

今、こゝに、また、私達は、美的日本の姿を感激に満ちて、見せつけられるのであります。

十七條憲法と大實律令

どこの國にも、建國と同時に、殆んど、同じ様に、法律と云つた様な、罰則が出来ます。規則をつくつて、それに叛いたものは罰するのです。西洋人の如きは法律が早く出来たから偉いかの様にすら考へてゐます。立派な法律が出来上つてゐる程、立派な國であるかの様に考へてゐます。

日本には法律といつたものは古くにはありませんでした。

恐らく西洋人から見たら、おかしなものであるに違ありません。

しかし、それは可愛想な西洋人の物の考へ方なのです。

外國の、あらゆる國はそうした罰則をつくらなければ、治めてゆくことが出来なかつたのです。日本にはそうした必要はなかつたのです。

聖人が現はれて道を説いたり、法律が出来るといふことは、その國が如何に治め悪い、性質の悪い人達が住んでゐたかといふことを證明する以外に決して、誇りとなる

ものではありません。

日本には、聖人の必要がなかつたのです。

日本には法令の必要がなかつたのです。

日本の國は、聖人に道を聞かなければ國民になれない様な民族でも、國柄でもありません。日本には法令がなければ決してうまく治まらん様な野蕃な國ではありません。

日本人は、日本民族は發生した時から國民として、發生してゐるのですから、國民といふ以外には物が考へられないのです。

外國人は、雑多に人が住んでゐて、その中から、だん／＼と強い人が現はれて國をつくつたのですから、そこに何か無理が考へられるのです。國民になるといふところに最初から無理があるのです。そこでいろ／＼と危介な事が起ります。

日本は、國民であるといふところから始まつたので、それ以外に何にもありませんからありのまゝの姿が國民であります。

ありのまゝ、そのまゝ、たゞ自然に素直にその通り、生活してゆけば、それで立派な道になつた生活をする様になつてゐるのです。そこで、何も、強いて聖人が出來て道を説いたり、法令を定めて、國民を窮屈な思にさせなくてもよかつたのです。

聖人が道を説くのも、法令をつくるのも、皆、それ／＼の國を日本の様にしたといふ願からなのです。

古、道を説いたり、法令をつくつた様な人が、日本の姿を見たら、恐らく、びつくりしてしまつたに違がありません。

明治天皇が憲法を御制定になつた際にも

「これは古から、ふみ行つて來たことを文章にしたにすぎないと、仰せられてゐます。

かうした國民と、國柄でありますから、外國の教や、法令でも正しいものでありさへすれば、何の無理もなく、立派に日本にも通用する筈なのであります。

それでも、我々の先祖は、古に於いて、世界のどこの法令よりもすぐれた法令と云ふものを文章にして、あらゆる點に於いて、日本民族が優秀であつたといふ證據を殘して呉れました。

その一つが十七條の憲法です、これは聖德太子が、お定めになつたものですが、決して、叛くと罰するといった様な罰則がありません。これはむしろ立派な道徳でありまして、この昔に、かくも立派なものが出来たと、その深い尊い、十七條憲法に外國人は驚歎してゐるのであります、その大要は、

- 一に曰く、和を以て 貴となし、さからふこと無きを宗と爲す。
- 二に曰く、ふかく三寶を敬へ。
- 三に曰く、詔をうけては必ずつゝしめ。
- 四に曰く、群卿百僚（役人）は禮を以つて本とせよ
- 五に曰く、むさぼりをたち、慾をすて、明らかにうつたへをきけ。

- 六に曰く、あしきを、こらし、よきをすゝむるは 古のよきのりなり
- 七に曰く、人各つかさどるところあり、みだりにみだるべからず
- 八に曰く、群卿百僚（役人）早くまいり、おそく退れ
- 九に曰く、まことはこれ義の本なり
- 十に曰く、心のいかりをたち、おもてのいかりをすて、人の違ふを怒らざれ
- 十一に曰く、明に功過を察して賞と罰とを必ずあてよ
- 十二に曰く、國司、國造、百姓からむさぼるなかれ
- 十三に曰く、もろもろの官に任ずるものは、よく役目を知れ
- 十四に曰く、役人はそねみ、ねたむこと勿れ
- 十五に曰く、私にそむき、公にむかふはこれ臣の道なり
- 十六に曰く、民を使ふに時を以てするは古のよきのりなり
- 十七に曰く、夫れ事をば、獨り斷ずべからず

の、如きで、立派な教であり、政治の方法であります。尙大寶律令は、文武天皇の御代に出来上つたものですが、これにいたつては、實に法律として、申分なき程の立派なもので西洋のどの法律にも決して劣れるものではないのです。

律の方は十二篇二百七十二條であらゆる場合の裁判の規範であり、令の方は三十篇九百四十九條で、政治の根本が、實にゆきといた條文によつて定められてあるのであります。これはながく、明治の御代になるまで用ひられて、政治の大本となりました。

十七條憲法の様には深遠な條文や、千年以上も政治の根本となつた様なものは世界のどこにもないのであります。

美術工藝

青丹によし奈良の都は咲く花の

にほふが如く今さかりなり

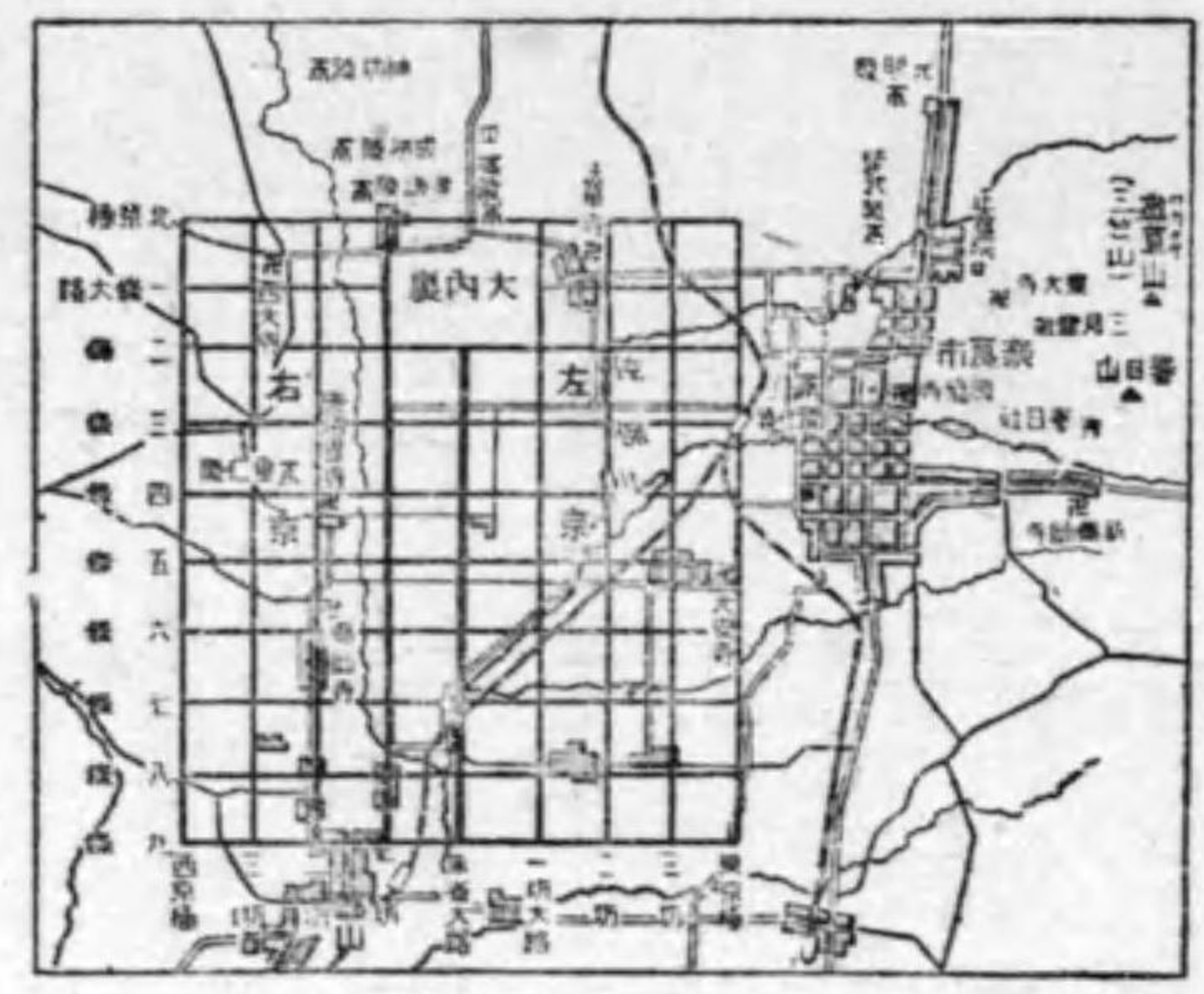
聖徳太子の飛鳥文化に基を開いて、これから、奈良、平安、鎌倉、室町と、各時代

各様に、優美な、或は剛健な、又は幽趣は文化文術工藝を建設してゆきました。

奈良の都は、都全體が立派な一つの美しい美術品でありました。

僅に七代七十餘年の間の都でしたが、その間に、實に、立派な都をつくり上げました。

その中でも、奈良大佛の如きは、その形の大ささから云つても、姿の立派な點から云つても、まことにすぐれたものです。



奈良古都の圖

高さは五丈三尺約十六米、金銅製であります。七十餘萬斤の銅と、一萬餘圓の金が使つてあります。そして、これを納めてゐる大佛殿を始め、興福寺、薬師寺、唐招提

寺等、所謂奈良七大寺は佛聖芭蕉が荒れはて、しまつた跡に立つても尙
奈良七重七堂伽藍八重櫻

と、感嘆した程の美麗なものであります。

この時代を天平時代とよんで、美術日本の國名を永く世界に誇り得る事になりました。

彫刻にいたつては空前絶後の發達をいたしました。

工藝美術品は今日まで凡そ三千餘點正倉院に残されて、世界の寶藏とうたはれてゐます。

世界的大文字

偉大なる私達の先祖が、大陸經營の大業をしばらく休んで、氣を養つてゐたのですから、そのすべての力が、こんどは文化の上に現はれてきたのですから、あらゆる方面に立派なものをつくりあげてゆくのは當然です。

文學の方面から云つても、他のどの民族よりもすぐれた、優秀なものをつくり上げたといふのも、決して不思議な事ではありません。

詩歌

△萬葉集▽

あし引きの山鳥の尾のしだりをの

ながくし夜をひとりかもねん

田子の浦に打出で見れば白妙の

ふじのたかねに雪はふりつゝ

わかぬ浦に潮みちくればかたをなみ

あしべをさして田鶴なきわたる

などの有名な歌をあつめた萬葉集は四四九六首の歌をあつめ奈良朝の御代に出来たものであります。上は天皇から柿本人麿、山邊赤人、大伴家持等の有名歌人から、下は名もなき百姓にいたる六百三十一人の歌があります。

海ゆかばみづく屍 山行かば草むす屍

大君のへにこそ死なめかへりみはせじ

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる時にあへらくおもへば

の歌もこの中にあります。

千年前の歌でありますが、現在、世界を通してこれ程の立派な歌はないのであります。

△古今和歌集▽

月見れば千々にもこそかなしけれ

わが身一つの秋にはあらねど

見渡せば柳櫻をこきまぜて

都ぞ春の錦なりけり

秋きぬと目にはさやかに見えねども

風の音にぞおどろかれぬる

白雲に羽うちかはしとぶ雁の

數さへ見ゆる秋の夜の月

おく山に紅葉ふみわけなくしかの

聲きく時ぞ秋はかなしき

などの有名な歌は平安朝時代に出来た古今集の中にあります。

古今集は萬葉集と共に、大切な歌集で、紀貫之、在原業平、小野小町等一二四人の歌集で、醍醐天皇の勅撰であります。

これからも續々と勅撰の和歌集が出ます、このことを考へてごらん下さい、一國の國王が歌をつくられ、しかも歌集を勅撰なされるといつた、ゆかしい國が一體世界のどこにありませうか、そして古今集はそうした勅撰和歌集の最初のものでありまして、ながく後世のもはんとなりました。この時代は、それ程に歌がひろく、うたはれて、一寸した便りなどは全部歌でなされた程に發達してゐたのであります。物を聞くにも、答へるにも、意見を云ふもすべて歌でなされた時代を思ふと、かぎなりき優雅な感じにうたれるではありませんか。

△其他の歌集▽

この他にまだ、世界に誇り得る様な詩歌集がたくさんありますが、その時代の代表的な歌人と、歌集を列記して見ませう。

後撰集 (村上天皇)

源順、清原元輔、紀内寺

拾遺集 (花山天皇)

赤染右衛門 伊勢大輔 紫式部

後拾遺集 (白河天皇)

能因法師

金葉集 (崇徳天皇)

詞華集 (近衛天皇)

千載集 (後鳥羽天皇)

藤原俊成 平忠盛

和漢朗詠集

新古今集 (後鳥羽天皇)

藤原定家 西行 鴨長明

金槐集 源實朝

著名作次々に現る

どこの國でも、先づ文字があつて、文章がなかい間練習されて、それから名作が現はれるといふのが、順序であります。

ところが、日本の萬葉集など見ますと、大體に於いて文字のなかつた時代の歌が大部分です。自然に言葉に現はれてうたひ出したのが歌です。工夫するとか、人に直してもらふとか、そんな苦心はいたしません。

自然に口に浮んで來たそのまゝが立派な歌であつたのです。深い勉強とか、學問などしなくとも、身分の低い農夫、樵夫から、兵士、役人、たゞいろいろな事に逢遭し

た時に、言葉に出して歌ひ出したまゝが、それで立派な歌になつてゐたのです。

昔から日本は言靈の幸ふ國といはれてゐます。言葉に靈があるといふことです。云ひ出した、語り出した、うたひ出した、そのまゝが立派に歌になつてゐるといふ。それだけ日本の言葉が、すぐれて美しかつたのであります。

漢字が傳つて、ことばを書き記すことが出来る様になつても、最初の中は、日本のことばや、日本の生活から生れた文字でありませんから、たいへんに、不自由な不便なものでした。そこで勿論、文字によつて立派な文章を書くなどといふことは思もよらぬことです。たゞ、漢字の音を借りて、日本のことばをそのまゝ、記していつたにすぎません。

そんな、不自由、不自由な時代にあつて、偉大なる著述があらはれたといふことは、確に、一つの驚異であります。外國人などには、とても判ることがらではないでせう。

後には、次第と假名文字の發明があつて、著述にも便利になつて來ましたが、古事記

の出来た頃には、まだ假名もなく、困難なことであつたのです。しかも、それがながく後代日本人の大切な書物となり、外国にも比べものない程に名著となつたのです。どんな名作が出たかを次に調べて見ませう。

1 古事記 三卷

私達が書物によつて、日本の古代の様子を知る事の出来る、最も大切な書物であり、古代の言葉、そのまゝで書かれた、世界的古典が古事記であります。これは、天武天皇の御代に、語部の稗田阿禮が、語り伝えられた古い日本の歴史を話して、太安麿が漢字をもつて、その通りに書いていつたものです。日本の神代の話や、建国の尊い歴史古代日本人の美はしい精神などが、古代の言葉のまゝに書かれています。出来上つたのが和銅五年阿禮の語つた儘を不自由な漢字によつて記したものですから、その不便さ加減はたいしたものであり、それだけに後世の人が読みにくくなつてしまひました。

本居宣長が一生を捧げて研究し、古事記傳四十八巻を著して、はじめて後代の人が読み得る様になつたのであります。

2 日本書記 三十巻

元正天皇の養老四年、舍人親王等が勅命によつて著はした歴史で、純然たる漢文で



舍人親王

あります。内容は古事記と似て、實に華麗なる漢文であり、支那の書物に決して劣らぬ名文であります。ついで、空海の創めたと伝えられてゐる平假名、吉備眞備の發明だと云はれて、

片假名ができて、簇々と立派な書物が出来てきました。

3 源氏物語 五十四帖

源氏物語は宮廷生活を中心に「光の君」母父子三代にわたる一大物語を紫式部が書

いたもので世界最大の物語であり、最も優れた物語であります。そして遂には、これ程の傑作は人類としてなし能はないであらうと、云はれる程の作品が千年の昔しかも一女性の手で書き上げられたのであります。



紫式部

今まではあまりに世界の人達が、日本の様子を知らませんでした。が、近頃だん／＼と判つて来て、日本の正しい見方が出来てくると今更ながらびつくりしてゐます。

私達も、日本に世界的至寶と云つたものがたくさんあることを知つて、もつと／＼心を占めて、／＼、先祖に負けぬ様、そして日本の八紘一字の精神をもつて、全世界

に望まなくてはなりません。

その別に、まだ／＼世界に誇り得る作品が無数に出ましたが、その代表的なものだけを参考にあげておきます。

4 竹取物語 (作者不明)

かぐや姫の物語で、作者が判つて居りませんが、日本における物語の一番古いものです。かうした書き振りの物語は、この時代の世界のどこにもまだ現はれて居りません。

5 其の他

伊勢物語 (在原業平)

美しい文を以つて描ける歌物語

枕草紙 (清少納言)

隨筆ですが、源氏物語と共に世界的文學と云はれてゐます。

- 大和物語 (作者不明)
 宇津保物語 (作者不明)
 落窪物語 (作者不明)
 狭衣物語 (作者不明)
 土佐日記 (紀 貫之)
 蜻蛉日記 (藤原道綱の母)
 榮華物語 (作者不明)
 保元物語 (作者不明)
 十六夜日記 (阿 佛尼)
 方丈記 (鴨 長明)
 太平記 (小島法師)
 徒然草 (兼好法師)

八、文永弘安の役

文化榮えて

神功皇后や、聖徳太子の御骨折りで、三韓や、支那、印度の文化を取入れてからは我國も大いに成長發達をとげ、文明に輝く新しい日本を築きあげました。ことに發達の途中に横つてゐた大問題即ち大化の新政を天智天皇・鎌足等の御力に依つて解決したので、我國は形の上にも、内容に於ても立派な國としてのねうちを具へることが出来ました。其れが奈良時代に入ると、いよ／＼待つてゐた様に、美しい花が咲き匂ふやうな盛な御代になりました。

それが京都に都が移され、いよ／＼華やかになりました。かうして一時大陸經營からはなれて、ひたすら文化建設に力をそゝぎましたからま

ことに立派な文明を現出することが出来ました。したがって此の時代から再び、日本は大陸に向つて、發達すべき時であつたのでせう。それだけの力が具つてゐたのに、

この時代の人達は、たゞ文化に酔つてゐました。

京都の町はまつたく、文化に酔ひしびれた町となつてしまひました。

奈良の都人の様子に

もゝしきの大宮人はいとまあれや

櫻かざして今日もゆきつゝ

であり、京都の關白道長は

此の世をば我が世とぞ思ふ望月の

かけたる事のなしと思へば

と、うたつたのであります。



かうした時代は決して正しい姿ではありません、必ずこゝに何とか、しなければなら

なくなつてまいります。

文化に酔つて榮耀榮華にふけつてゐると云ふことは、國

の正しい姿ではありません。

この間から質實剛健、勇武を生命とする武士階級が生ま

れて來たといふことは、當然なことであり、遂には武家政

治といふ變則な政治が生れて來たのも、また己むを得ぬこ

とであります。

清和天皇・桓武天皇の御子孫がそれぞれ武士となつて、

一方は平氏といひ、他方を源氏といつて、新しく起つた

武士階級の棟領となりました。

先づ平氏は、保元、平治の亂によつて、京都の公卿の無



氣力を知り、どうしても、これを革新しなければならぬと悟り、遂に平清盛は太政大臣となつて天下の政治をとりました。

しかし、文化の都に入つた平氏も遂には京都文化の風に染み、折角改新しやうと思つて、その目的を達する事が出来ませんでした。そこで源氏が代つて、頼朝は鎌倉に居て、征夷大將軍の位で政治をとる事になりました。將軍が天下の政治をとると云ふ事は、決して、我國體にとつて正しい事ではありませんが、文化の夢に酔つた時代を革新するにはまた已むを得ぬ事柄でした。隋落し、柔弱化して、しまひには、我が民族の尊い使命達成も忘れてしまふのではないかと、あやぶまれたのも、武士階級の興起によつて、力強く踏みとどまる事が出来ました。

武道の華

榮華の夢に酔ひしびれようとした王朝時代に、日本人の血潮は何で我慢が出来ませう。誰が云つたのでもない。誰が教へたのでもない。日本人の血潮が、已むに已まれ

ぬ、欲求からして、遂に武士階級をつくり上げました。

血の叫びです。血の希及です。血の欲求です。正しい日本人の姿にあこがれる姿が武士階級となつて現はれました。

武力をねつて、他人を征服しようといふのではない。戦術を研究して、獨り偉くならうといふのではない。だらけきつた王朝の空氣から本然の姿にかへりたいといふ、本源の血の欲求が武士階級をつくり上げました。

したがつて、日本の武士程、美しく、尊い姿を示したものはありません。

勇武にして、美麗、剛勇にして、優華、武士の道を武士道といひます。武士道こそは、全世界に誇り得る、優雅な道徳であります。

剣をとつてたつ武士

しかし武士は優美をこよなく愛しました。

服装、作法、どこに日本の武士程に優美なものがあるでせう。

戦場に命をやりとりする。

しかし、武士はあくまで作法を尊びました。戦ふに戦ふ作法あり、打合ふに打合ふ方法があり、切腹するまで俊厳な作法がありました。

勝つ爲に戦ふ武士

しかし武士は正々堂々たる態度と禮儀にかなふことを庶ひました。

武士のもつとも、憎んだのは卑怯末練といふことであります。

金銀で装つた武士が正々堂々、道にかなふ態度をもつて、勇しく戦ふことをどんなにか、庶つてやまなかつたか知れません。

1 八幡太郎義家

天喜四年陸奥の長安倍頼時叛して、源氏の棟領頼義・義家父子勅命を奉じて追討にむかひました。

頼時、磐城、岩代、陸前、陸中、陸奥を領して、勢頗る強く、衣川に本據を構へ、



八幡太郎義家

諸所に出城を設けてゐました。

流石鎮守府將軍頼義の勇武をもつてしてもなか

くに征服し得ず、遂に九ヶ年の長期應戦となつた

のであります。その中にも諸所を陥れ、本據衣川

館を攻撃することになりました。敵將は頼時の子貞

任、身の丈六尺餘寸、腰周り七尺四寸の大男、力あ

くまで強く、しかも兵を用ゆる事にたくみで、なか

くに凄まじい勢でありました。

味方の大將八幡太郎義家、年やうやく十七歳、日

頃の手竝を見せるはこゝそと、四方に馬をとばしな

から、得意の大弓をひきしほり奮戦、よくつとめ

て、遂に衣川館をおとしられました。

敵將貞任、城を棄て、逃げ去らうといたします、義家遙に望みて、馬をとばし、

「敵に後を見せて逃ぐるは卑怯千萬、暫し引き返せ、もの申さん」

敗將ながら、流石は奥州の長貞任、呼び止められては後を見せることも出来ず、馬を止めて振りかへりました。

見れば、榮華を誇つた衣川館は炎々たる火煙の中にあつて、官軍のなだれこむ喊聲が天地をとゞろかしてゐます。

義家は、今やこの火焰の城と、落ちゆかんとする敵將を見て、そゞろに哀をもよほし一句、

衣の館はほころびにけり

と、詠ひました。貞任の心はどんなであつたでせう。先祖代々傳えられた館を落ちのびてゆかなければならないのです。

衣の館はほころびにけり

その通りです。而しどうしようといふ譯にもゆきません。源氏の大將の一句につけて

年を経し絲の亂れの苦しさに

と、義家の下の句に冠して、上の句をうたひました。

將に生命の瀬戸際です。義家は自分の胸元にねらつて、満月の如く弓をひきしほつてゐます。萬感こもく、生きた空もないといふ境地でせう。

しかも、靜に義家の句に冠して、立派にうたひあげました。

都を遠く東北の敗將貞任の死に面して、これだけの心にゆとりがあつたのです。

生命を懸けての、戦の最中です。矢をはなせば、もう生命がありません。敵味方の軍兵は算を亂して、奮戦してゐます。

その瀬戸際にあつて、歌をよみかけた義家の、ゆかしい心もさりながら、瞬間の後には生命がないであらう、生死の境地にあつて、自分にむけられた矢の前に詠ひかへした貞任の心も、日本人ならでは見られぬ、おくゆかしさがあるではありませんか。

義家は貞任の態度に感心して、つがへた矢を外すと、につこりと微笑まれて、目禮をいたしました。

貞任の大きな眼にも白い涙がありました。まことに、芝居の如くに、美はしき情景ではありませんか。

このおくゆかしさ、このやさしさ、お互に目禮して去りゆく姿を思ふと、何かしら、壯嚴な感じにさへなります。

この一瞬に、義家と、貞任の心はびつたりと觸れ合ひました。貞任は後に義家の無二の忠臣となりました。

2. 近衛大將重盛

王朝時代已にすぎて、平清盛武門に出でて、從一位太政大臣、一門の公卿十六人、殿上人三十餘人、地方官六十餘人、おそれおほくも安徳天皇の御母建禮門院は平家から出られるといつた、世は武門の春となりました。

天下の政治は平家の思ふ様になる程の權勢となりました。

「平氏に非らざる者は人に非らず」

と、誇る者が出るといふ程の極盛を見る様になりました。

かうした時に、人間はとかくに、道を忘れ勝ちになります。わがまゝになります。人の迷惑を考へない様になります。

武士は、日本の力なき、夢の様な王朝時代を革新する使命が、歴史的に考へても、當然にもたされてゐた譯

であります。

それが、己の力の大きいのに自慢するやうでは邪道です。日本の本當の姿を忘れたものといはなければなりません。



平重盛

だが、日本の本當の魂は決して、隠れてしまふものではありません。平家が權勢に酔ふ姿を更に革新しなければならぬと考へついた者が己に現はれてきました。

藤原成親、平康頼、西光、俊寛達であります。それよりも、もつと、私達の忘れる事の出来ないのは、近衛大將平重盛であります。

俊寛等、鹿谷に集まつて、平家征伐の秘密會議を開きました。この人達が全部清盛に捕へられてしまひました。

「平氏に非らざる者は人に非らず」

と、豪語して來た一族を征伐せんとした人達が捕へられたのです。

これは確かに大きな事件です。

この大事變に遭遇して、武將重盛の血潮に何が湧きたつた事でせう。

太政入道清盛は直ちに一族に令して軍兵を召集いたしました。

平家から考へれが謀反人が現はれたのです。うつかりすれば、平家は滅びるところ

であつたのです。

平家一門にとつての非常信號であります。鹿谷の秘密會議には畏れおほくも法皇が御關係になつてゐられる様子です。若しそうだとすれば、平家は一朝にして賊軍となつてしまふところであつたのです。

將に平家一門にとつての危機でありました。清盛は法皇に伏見の北御所にお移り願つて、二度と平家征伐の相談の出来ない様にしてしまふと考へて軍兵を召集したのです。

無理のない考であつたでせう。

しかし無理のない考といつてゐてよい事なのでせうか、平家の棟領重盛の血は、この時、何と叫んだでせうか、

私達は、しばらく、重盛の聲を聞かうではありませんか。

重盛は隠居した父清盛が兵を擧げるといふ事を邸にゐて聞いて、驚きました。直ち

に車に乗つて清盛の邸にかけつけました。

見よ、六波羅の清盛の邸には軍兵が満ち／＼てゐます。

馬の腹帯をかためる、兜の緒をしめる、場内殺氣だつて、もの／＼しい様子です。

そこに、重盛は車をつけて、静かにおりたちました。平服の儘です。

弟の宗盛はおどろきました。父の命令もきかないで、のこ／＼と下りたつた兄重盛の袖をひくと、たまりかねて

「兄上！ これ程の大事件に何事です。父上も巳に武装してゐられますよ」

重盛は立ちどまりました。強いまなざしできつと弟をにらみつけました。

「大事件とは何事か、

大事件とは陛下や、皇室についてこそ申す、その武装は何事か、

朝敵はいづこにあるか」

そうです。重盛の中にある日本人の血潮は叫びました。

——朝敵はいづこにあるか——

朝敵なくしての公臣の武装はありよう筈がない。

我々は天皇の爲に、皇室の爲に戦ふ筈ではありませんか。

宗盛は兄重盛の嚴肅なる態度に思はず手をつきました。大庭にひしめきたつてゐた軍兵共も一齊に地に兩手をついてひれ伏しました。肅然たる情景の中を重盛は重々しい足どりで父清盛の居間に入りました。

その様子を遙に望み見て、巳に剃髪して淨海と云つた清盛も、流石に武装姿の恥しく衣をまとつて、重盛に面會いたしました。

父清盛の前にびたりと座をしめ、おもむろに頭を下げて、その儘化石の如くに沈黙をつゞけてゐました。

我家の一大事！

それだけに、迷つた清盛でしたが、子供重盛の莊重な態度に、さまざまと心が亂れて

來ました。大庭の一族郎黨、數百の軍兵も寂とし聲一つたてません。

清盛の心の亂れは、衣の襟元にも現はれて、鎧の金具が時に冷たく、胸のあたりに光ります。

しばらくあつて清盛は重盛に向ひ

「かように、世の中が騒しくては、人々も困難をいたすであらうから、一先づ世の中が靜まるまで法皇に、伏見の北御所へお移りを願はうかと思つてゐるが、そなたはなんと考へられるか」と尋ねた。

聞き終つて靜かに顔を上げた重盛の光つた眼から、はらくと落ちたものがあつた。

やがて、きつと結んだ口がひらかれて、日本一の諫言が漲り出ました。

身は平氏にして平氏にあらず、子にして子にあらず、日本人の血の叫びが一大諫言

となつて、血を吐く言葉となりました。

「父上！」

胸を打つ莊重な一語です。

「お言葉を承はれば、もはや、平家も下火と思はれまする」

平家が下火？ 清盛の顔はほ一つと上氣してきました。日本六十餘州の半を領し、位人臣を極め、勢の赴くところ、畏れおほくも法皇の御自由すらを束縛せんとする平家の運命が下火？

清盛はたゞ、平家を思ふばかりに、平家を永遠に榮へさせたいばかりに、兵を召し集めたのであつたが―

「昔から今まで、太政大臣の位にある者が、甲冑を附けた例を聞きません。まして父上は既に頭を剃られた僧侶の御身ではありませんか」

太政大臣は國家の重役、朝廷の一大事に非らずして、みだりに武裝するは己に道にあ

やまれるの行、人間道を外して榮ゆるの筈がありません。

「この重盛は、世の中に四つの恩があると聞いてゐます。

一は天地の恩、二は君の恩、三つは親の恩、四は世間のすべての人の恩でございます。

この日本國中は、どんな山の中、濱のはてでも、陛下のお治めになる國でないところはあります。

その國に住んでゐる人の中でも、平家程のしあはせものは他にございますまい。

平家の一門はかほどに繁昌をし、父上は太政大臣といふ一ばん高い役にさへついでをられます。私如き愚なる者にも近衛大將といふ重い役についてゐます。

これ偏に陛下の御恩に他ならないではありませんか。

その平家が法皇をかりにもおろそかに思ひ參らせたとすれば、必ず神の罰があたりませう。

君に謀反を起し、國に亂暴をなすものを征伐して、國の内を静めてこそ、平家は君の恩を知るものと申せます。

この重盛も、君の深い御恩を受けて、高い位を貰ひ、重い役についてゐますから、法皇の御所に亂暴を働く者があれば、直ちにはせ參じ、御所を守らねばなりません。すまい、しかし、その御所に參る敵が父上でございましたら、私はどちらに向いて弓を引きませうか、君の恩を思ひ、君に忠義をつくそうと思へば、法皇にお味方申し上げて父上に弓を引かねばなりません。父上に弓を引けば、親の恩を忘れ、親に孝行をつくさないことになります。

重盛、忠たらんと欲せば孝たらず、孝たらんと欲せば忠たらず、進退こゝにきはまります。

もし、父上が如何にしても、法皇を伏見の北御所にお移し申し上げたいといふのであれば、先づ重盛の頭をはねて、しかる後にして下さい」

重盛聲涙共に下つて、父清盛を諫めました。その座に合せたものは、皆涙を流して聞いてゐました。清盛も今は深く後悔して軍勢をくり出すことをとりやめにする事になりました。

まこと、われ／＼は皇室の爲以外に戦ふ理由は少しもありません。

皇室の敵は、われ／＼の敵、われ／＼もまた、皇室、天皇陛下のものではありませんか。

重盛の言葉こそ、三千年來、一億の同胞のもつ血の叫びでなくて何でありませう。

今日よりはかへりみなくて大君の

醜の御楯と出でたつ吾は

○武家政治

武士、質實剛健をもつて起り、平氏先づ入京して、王朝の弊風を改めんといたしました。かへつて京風に染み、随弱になつてしまひました。

代つて源氏起り、頼朝は京に入らずに、鎌倉に居て、兵馬の權を收めて、全國に質實剛健の武士道を弘めました。

これより天下の政權は公卿の輔佐するところからはなれて、征夷大將軍の幕府にあ

つて、政治を輔佐する、變體的なる武家政治が行

はれる様になりました。まことに遺憾な事であり

ますが、しかし、やうやく、随弱になりかけた氣

風を全く一新して、全國に武風が漲り、未曾有の

國難、文永弘安の兩役に大元軍を撃退する事が出

來て、近代日本の新出發の基を築くことが出來た

のは、武家政治のあづかつて力ありと云はねばな



源頼朝

りません。

大化の革新後、我國はひたすらに、内にこもつて、靜かに氣を養つてゐる中に、王

朝時代の華美を産みました。

この華美を革正する爲に武士が起つたのです。しかし武士は入京することを嫌つたために、變體的な武家政治が行はれる様になつてしまひました。

武士は武勇の氣風を醸成することには成功いたしました。政體に變體的なものをつくつてしまつた。この矛盾せる時勢に對して、果たして、日本人の本性はどんなになつてしまつたかを試す、一大試鍊が元寇であります。

日本民族の試金石として、元寇と云ふ大事變が起つたのであります。

蒙古族起る

大化の改新以來、日本が大陸經營の矛を一時收めてから、支那大陸の狀勢もすつかり變つてしまひました。

あの廣大な土地に雜然といろ／＼な民族が住んでゐるのですから、決してうまくゆく筈がないのです。

文化を誇つた唐は宋に滅され、その宋もやがては衰へてしまひました。宋は漢民族の建てた國であります。この漢民族が弱くなつてゆくと、契丹族は遼といふ國をたて、滿洲族は金を建國し、トルコ族は突厥と呼ばれて、これも亦一つの政體を持ちました。

そして、それ等の民族はそれ／＼相争つてゐました。その頃、ゴビの沙漠の北の方今のバイカル湖の附近に住んでゐた蒙古族が次第に強くなつて來ました。

その頃の蒙古族は、鳥や獸を食物とし、家はテントの様なもので、何時でも自由にひきうつれる手輕なものに住んでゐました。

非常に勇氣のある民族で、その上に大そうがまん強く、食物などなければ、絶食しても働くといふ風で、馬を使ふのは上手だし、行動はすこぶる機敏でありました。したがつて戦争が強く、君主の爲ならどんな命令でも、きいて、決して生命を惜しみませんでした。

一三〇
その蒙古族の中から鐵木眞といふ英雄が現はれ、遂に皇帝の位について、成吉思汗と云ふやうになりました。



して去つた」

元の領土

この人が蒙古の太祖といつて、非常に強く金・宋を始め、遠く印度、ベルシヤ、ロシアまで攻めとり、一生の中に彼は、百に近い異民族を降服させ、世界に類のない大征服者となつたのであります。

二代太宗は更にロシアの大半を占領し、ポーランド、ドイツ、ハンガリヤの方まで従へ西洋人からは悪魔の様におそれられたのであります。西洋人は蒙古來侵の様子を

「彼等は來た、毀した、焼いた、殺した、掠めた、そう

と、述べてゐます。

蒙古兵は、疾風迅雷の如く、活動して、白人をふるへ上らせたものであります。

かくして、蒙古は白人を征服していつて、東洋、西洋にまたがる、世界空前の大帝國を建設したのであります。

この國が日本に攻めよせて來たのですから一大非常時であつたといふべきであります。

蒙古來

世界の大半を領土とした世祖は愈々日本を征服してしまほうと決心した。

元から考へると日本なんか、問題にならぬ程の小さな國である。そして蒙古は武器も進んでゐた。日本人などが、夢にも知らぬ鐵砲も已に持つてゐた。そして遠く西洋諸國まで征服した戦争の経験者である。建國以來、戦つて未だ一度も負けたためし、のない國である。

この一大強國が日本におしよせて來ようといふのだ。
日本こそは風前の燈である。
未曾有の大國難である。

しかも、この大非常時局を背負つて起つた日本の責任者は誰であつたらうか

年、わづかに十八歳の執權、北條時宗なのだ。

文永五年、蒙古王、先づ國書を我に送つて來た。脅迫状である。

手紙でおどかせば、かんたんに従つてくると見て來た



北條時宗

のである。

しかし、北條時宗は斷乎、これを一蹴してしまつた。

つゞいて、また書面が來た。また來た。時宗は、一度として返書を送らなかつた。

五度國書をうけて、五度おひ返し、更に使を斬つて、覺悟の程を示したのである。その意氣や、さかん、遂に元の世祖烈火の如くに憤り、數十萬の大軍を動かして、入寇することになつたのであります。

それは、もとより覺悟の前、生々發展するのが、我民族の使命である。

武士は、やうやく墮弱たらんとした國風に活を入れる使命をもつて出でて來たのである。

この活を入れた國風を試さんための試練の嵐ではないか。

國難來！ 國難來！

おどろくことはない、われにたい反撃あるのみ。

大陸抱擁は、我民族の先天的使命である。大化の新政以來、大陸と遠ざかつた日本の實力を試さんために、我民族に使命を再認識させんが爲にの國難來である。

當時の人は誰もがそうした事を云はなかつたかもしれぬ。

しかし、われ／＼に流れてゐる血はそれを自覺してゐた。
國難來！

その聲は忽ち、國內にひびきわたつた。

來たれ、みよ我が力を試さん。

武士も起つた、商人も、百姓も、一齊に起ち上つた。

畏くも、龜山上皇は、親しく先祖諸神に祈願遊ばされ、尊き御身を國難に代えん

と願はれた。一身を捨て、國難反撃の一矢たらんと起つたものは、上御一人だけでは

勿論ない。女も男も、老も若きも、日本人の血を持つ者は等しく起つた。

執權時宗は青年である。青年執權の腕のみではない、民族の血の叫びである。

しかし、日本人は常に捨身の戦法で行きます。勝つか負けるかではありません。

血の信念に生命を捧げるのであります。

神と共にあつて戦ふのであります。

一人一人の日本人が、自分が戦つてゐるではありません。

血の信念で、神と共にあつて戦つてゐるのです。

國の爲に、神の爲に戦つてゐるのであります。戦つてゐる姿は人間であつても、神

の戦ひであります。

勝つ、負ける、そんな事を考へてゐません。勝つに定まつてゐるのです。

日本國が負ける、かつて、そんな事を考へたことはありません。

勝つ！ 勝つに定まつてゐるのです。

勝つに定まつてゐるから、たと自分の生命を國に捧げて、戦へばいゝのです。日本

人の前には不可能はありません。

出來ないといふことはないのです。戦死をする！決して負け戦で死ぬのでは

ありません。

勝つ爲に死んでゐるのであります。

日本人は死ぬ時に等しく
天皇陛下萬歳

と、云つて死にます。

これで、死んで、私のつたない生命一つを捧げて、日本は永遠に榮へるのです。蒙古軍は人数が多かつた。戦法が進んでゐた、そんなことにおどろく日本人ではありません。進んで國難に殉ずる名譽のために戦つてゐるのであります。

來れ！ 國難、

忽ちにして舉國一致、一路國難反撃へと起つたのであります。

たとへ、如何程の敵がおしよせても、決して、おどろくのではないのである。

蒙古との交渉は文永五年から始まつた。

五年、六年、七年、八年、九年、十年と六ヶ年は外交交渉時代であつた。

蒙古は、その強大なる威勢をもつて、日本を屈服せしめんとかゝつたのである。

北條時宗は、この外交交渉に一度ものらなかつたのである。

常に堂々と反撃の態度をとつて來ました。

六年間、遂に一度も相譲らなかつたのであります。

紀元一九三四年永文十一年、蒙古は、遂に武力を動員いたしました。

兵四萬、戦艦九百、

突如對馬に上陸いたしました。

宗護代宗助國、一族と共に華々しく戦つて、ことごとくが國難に殉じて、日本武士道の華を誇りました。

壹岐守護代平景隆も一族と共に殉じました。十二月二十日博多灣に迫つて來た蒙古軍に對して、九州の諸族はまことに涙ぐましく奮闘をもつて反撃してゐました。

しかし、何分共に、蒙古軍は大戦争に馴れてゐました。戦法も違つてゐました。

日本の戦法は個人個人の戦法です。名乗りをあげて、敵を定め、いう／＼と戦ふの

です。

ところが蒙古軍は船を下りると、直ちに馬に乗つて、旗をあげて攻めかゝります。太鼓をたゞき、銅羅をうつて、ときをつくるので、第一に日本の馬は驚いて立ち上り、進むことも退くことも叫びません。

蒙古の射る矢は短いけれども、矢の根に毒を塗つてあるから、當るものは皆毒氣に負けてしまひます。數萬人のものが矢前を整へて雨の降る様に射かけるからたまりません。

攻め寄せる時も一面に立ち竝んで來ることもあれば、中をあけて兩方の端を廻し合つて來ることもある。そして悉く取りこめて打ちとつてしまふ。射殺された馬を食ふことはいふに及ばず、日本兵で勇敢なはたらきをした戦死者の膽を取つて食つてしまふといふ亂暴さでありました。

よろひは輕し、馬はよく乗る、力は強い、勢さかんにて勇猛、しかも自由自在に活

動する。大將は高いところにあつて、引く時は逃鼓をうち、攻める時には攻鼓をたゞく、逃る時は鐵砲を飛ばして、あたりを暗くし、その音がけたゞましいので、目も耳も鳴りひゞき心惑ひ膽をつぶして、東西もわからぬ様になつてしまふ有様であります。

これを日本の軍の様に、相互に名乗り合つて、ゆる／＼勝負を決するのと比べたら大變の違ひで、とにかく此度の合戦は大勢一度に寄り合つて、手足の様に働いて、我も／＼ととり付きながら、へし取らうとする。そんなところへつき進む程の日本人は迎も生きてかへつて來ない。

流石勇氣にはやる鎌倉武士も、九州男子もあまりに進歩した敵の戦法に對して、随分困つたものであります。

しかし、たとへ、如何程に頑強な敵であつてもひるむ様な日本人ではありません。どんな不可能な事でも、かならず突破するといふのが、日本人です。

肥前の松浦黨などは、千余人の隊を組んで急に襲ひ、三千人を一時にぶちきつたなどといふ痛快な話があります。

竹崎季長父子、菊池武房、少貳景資、などもそれ〴〵目覺ましい働きをいたしました。

敵は民家に火を放ち、黒煙にまぎれて攻めて來ます。

かうした戦のうちに夜に入りました。

日本軍は退いて水城に據り、敵軍、ことごとく船にかへり明くる日を待ちました。

文永の役は、まったく、日本人に、新しい武器と、新しい戦争を見せて呉れました。

普通に戦つては、なか〴〵に勝てない、何とか、新しい戦法でゆかなければならぬ、といふので、晝の疲れも忘れて、作戦計畫に餘念がありませんでした。

一方、船に逃げこんだ元軍の方も驚きました。たやすく勝つものと信じてやつて來

たものが、どうして、進んで退くことを知らぬ武勇、死して決して悔ひぬ壯烈、流石の元軍も驚きました。

日本は神國だと聞いてゐたが、その通り、日本人の奮戦してゐる様子などといふものはとても人間業とは思はれません。

各部將の中には、もう戦ふ元氣を失つた者もたくさん居りました。

中でも、賊將劉復亨の如きは、日本軍の戦法の違ふ有様にぞく〴〵とたほれてゆくのを心地よく、あざ笑ひながら眺めてゐるところを、ビュツと風をきつて來た、我が弓の名手少貳景資の一矢の爲に馬諸共に射落されてしまつたものですから、おじけついたのも、一番甚だしいものです。諸將が相談してゐる眞最中

「諸君が、如何程に、考へて見ても駄目であらう、日本は神國である、ぐず〴〵してゐれば、一人残らず全滅するに違ひない」

弱音を吹き、さつさと自分の船にかへり、どんどん、本國さして、きりあげてしまひ

ました。

諸將達も、それを聞くといよいよ、臆病風にとりつかれ、退却を主張する者が次第に多くなつてきました。

かれこれしてゐる中に、俄に空が曇つて、大風雨となり、海が荒れ出しました。

「そら、神の怒り！」

と、一同、血の氣を失つて、たち騒ぎました。ぐづ／＼してゐれば全員、海中に沈んでしまふであらう。

「神の怒り！」

「神の怒り！」

もう、どうする事も出来ません。

全軍、おそれ、おのゝき、生きた空がありません。

一時も早く逃げなければ全滅してしまふ、

その心配に、誰の指揮するともなく全船、いかり、をあげて、逃げ支度です。

いかりを抜けば、もう船は木の葉同様です、おじけづいた腕で漕いでみても、船が満足に動く筈 ものではありません。

かへつて、岸にうち上げられて、岩にくだけて、破船してしまふ。

この世の地獄が、嵐の海上に、まき起こされました。

我軍は、その晩は作戦計画も出来て、明日の戦争に、そなへて、それ／＼眠につきました。

明けて、翌朝、我軍は海上を眺めて、おどろきました。一般の船もないのです。こと／＼く岸に砕けて、溺死してゐます。

からりと晴れた海上には平和な朝日が、さん／＼と輝いてゐます。

全軍は岸に膝いて、天皇陛下の御稜威を仰ぎ神の加護にお禮を申し上げました。九百艘の兵船と、四萬の大軍が一日一夜の戦で、かたづいてしまつたのです。

朝廷におかせられては、使を伊勢神宮を始め諸社に遣はして戦捷を告げしめられました。

大難一度は去りました。

しかし安心する事は出来ません。

いよ／＼備をかたくし、たとへ何萬の敵兵が再度攻めてくる様なことがあつても、決して、寸土もけがさしてはならぬと、ます／＼上下心を一にして、心をかためました。

果たせるかな、建治元年四月、忽必烈は又々五人の使者をおくつて來ました。

蒙古の兵達は大敗し、おそれ、おじけて、歸つたのでありましたが、王様はその事を少しも知りません。必ずや日本軍をなやまし、破つてかへつて來たものと思つてゐますし、逃げかへつた將兵達も、そう報告したものですから、こんどこそは日本も考へ直して、従つてくるのであらうと思つたのでせう。

またしても無禮な使をよこして來ました。

時宗はこれを鎌倉に廻らせて、龍口に首を斬り、日本の決心の程を示して、國民にもますます、防備を嚴重にせしめました。

防備を嚴重にするだけではなく、進んで、元に攻め入らうとすら準備いたしました。

九州博多の海岸には長さ四里、高さ一丈或は二丈、所によつては四丈五尺もある石壘を築かせ敵軍に備へました。

元使更に弘安二年に至つてきたのも、これを博多に斬り、少しも折れて出ませんでした。そこで忽必烈はいよ／＼怒り再度入寇の決心をいたしました。

弘安三年

兵船三千

東路軍

蒙古兵

支那兵 四萬

高麗兵

江南軍

支那兵一十萬

東路軍は朝鮮を経て九州へ、江南軍は揚子江口から海を渡り、壹岐に會して日本に大舉して入寇する事にいたしました。

かゝる、外國の大軍を迎えるのは、國史はじまつて以來の大事件であります。

かねて覺悟をしてゐる事とはいへ、いよ／＼かうなつては我國の上下も奮ひたゞずには居られません。到るところの社寺では國運の長久が祈られ、畏多くも龜山上皇は石清水八幡宮に參詣の上、御筆の願文をさゞげ生命にかはつて國難をはらひのけたといのられました。

天皇、法皇、上皇、各親王といはず數日も引きつゝいて斷食遊ばされ、夜もろくろく眠られずに御祈りをこめられました。

時宗もまたさきに鎌倉の建長寺に祈願文をさゞげて國家安穩を祈つたが、いよ／＼國難の近いた時に當り、特に全國に命を發して曰く

「元軍がいよ／＼大舉する。防戦の備はずになつたけれども、不幸にして九州が破れる様な事があつたら、兩六波羅の軍勢は直ちに九州に下れ、我は東國の兵を率ゐて上り、畏くも、主上東宮をお護りする。又後嵯我法皇、龜山上皇を關東にお迎へしよう。國家の大事、この時より外においてない、軍に従ふものは、身命をなげうつて敵を防ぎ、家に留るものは、なるべく節約して軍費をつくるやうにしなければならぬ」

かつて我等の祖先は三韓を征伐して、國威を海外に輝かされてゐる。今もし蕃族の爲に辱かしめられる様なことがあつては、我等は何の面目をもつて地下の祖宗に

對し奉ることが出来ようぞ、

それ一同、協力一致

この外敵を拂ひ除けよ」

國民一同、之を讀んで身も心も奮つて仕様がなかつたであらう。日本人の血は、本然の姿に高潮る、腕はしきると鳴る

明治天皇御製

しきしまの大和心のをしきは

ことある時ぞあらはれにける

弘安四年五月二十一日 東路軍、海上を覆ふ大軍をもつて對馬に着いた。

あり余る敵勢は壹岐にも上陸した。少貳資時は、松浦、龍造寺等の諸族と共に防戦つとめて、ことごとく戦死した。

島民三百餘人、つきぬ恨をのんで敵の手に惨殺されたのであつた。

壹岐を荒して軍元は大舉太宰府に向つた。

六月五日、博多灣に入つたが、今度は我が石壘に防げられて上陸することが出来なかつた。

待ちうけた我が諸將

少貳資能

少貳景資

大友定親

菊池武房

葉室高善

總大將 秋田宗盛

それごとく石壘によつて楯を列ね、鏃を揃へて射出するので、敵はさんぐくに苦しめられる。

その中には小舟に乗つて大船に近づき、火を放つてこれを焼くものあり、艦内に躍入つて敵を斬殺す者もある。

かくて、その日も暮れて、兩軍は陸に海に疲を休めることになりました。

元氣一ばい、勇氣りん／＼たる我勇士はたとへ、夜と云つても、じつとしてはおられませんが、闇に乗じて、小舟に乗り出して敵艦を襲ふ者もあります。

草野次郎經長の如きは、敵艦一隻を焼きはらひ、二十一人も斬りたふして、堂々と引き上げたといふ痛快な話もありました。

かうなると敵は驚いて船のはなれ／＼になることを慎み、鐵の鎖をもつてつなぎ合せ、その上に板までかけて連絡をとつたので、あだかも、海上に一つの大きな島でも出来た様になりました。

これは、我が國に大船のないのをあなどつての構でもありました。

實際、我が勇士は、近づけば撃たれ、寄れば沈められ、非常に苦戦のすがたとなり

ました。

その後も日に日に戦はつゞけられました。

四國の伊豫の勇士河野六郎通有はこの様子を見てくやしくてたまりません。

「おのれ、一つ目にも見せてくれん」

と、二隻の小船で乗り出しました。

島の如き大船の集りに小船二隻が近づくのであるから、丁度、戦艦にボートが近くやうなものです。

味方もおどろきました、敵兵もあきれました。

敵は雨霰の如く、この小さな二隻の船にむかつて弓矢を射出しました。

小船の兵たちはばた／＼倒れてゆきます。

通有少しも屈せずに進む中に一矢はちやうと、ばかり、彼の左の肩に深く立ちました。

爲に弓を引くことが出来なくなつてしまひました。

そこで大刀を抜いて大艦に攻めつけました。

しかし高き艦上に乗りうつることが出来ません、そこで帆柱を倒して、これを橋に敵艦に躍りこみました。

見るまに數人を斬り、遂にその船の大將を生捕り、悠々と引き上げてきました。

その豪勇さ、敵も味方も舌をまいておどろきました。

かうした我軍の襲撃にたまりかねた敵軍は遂に鎖を解き、灣外に出て江南軍の到着を待つことになりました。

七月晦日

江南軍十萬、三千五百艘

遂に到着して、全軍の意氣多いにাগり、この大勢をもつて、總攻撃を決意いたしました。

將に神州日本危機

四千數百艘の軍船

十數萬の東洋聯合軍

勢揃ひなつて、大學進撃せんとす

未曾有の大國難

噫日本國の一大危機

日本民族の一大危機

將士、ことごとく國難に殉ぜんと、最後の酒宴を張つて、悲壯の夜を迎えました。

夕陽靜に沈んで、西空は火と燃ゆ、

敵兵船地平線に並んで、喚聲とどろき聞ゆ、

兵船一度動かんか、直ちにして修羅場、

嵐の前の静けさ、
この夜は静かに暮れてゆく、

「こしやくな日本軍奴！」

蒙古十數萬の軍勢は、明日こそは木葉みぢんと、その夜は前祝ひにぎくしく夜を迎へました。

しかるに、あゝ、遂に神助いたる。

夜更けて、聞け！遠く海のかなたから聞こえとゞろく無氣味な波音！

見よ！南方の空にひらめく雷鳴と一群の怪雲たちまちに、元軍四千五百艘の上を覆ふと見るや、お！ 神風

一陣の風、さつと吹くと見るや、波は怒り天は裂けて、一大暴風雨となりました。

大波は天を捲いて高く揚り、雨は瀧の如し

鎖を以つてつなぎ合せられてゐた敵の船はことごとくたちきられ、木の葉の如く、波に吹き亂される。

精神亂れて、荒れ狂ふ波に飛込む者、
泣き叫ぶ者

この世の末かと思はれる修羅場が元軍のゐる海上に忽然として現はれる
船と船と衝突するあり、岩角に碎けるものあり、ひつくりかへるものあり、波にまかれるものあり

勇敢なる我が將士はこの波浪をおかして小船を進めてゆく、あゝ人間業か、
あはて、ふためく、敵船は、かくして、ことごとく沈没してしまひました。

十數萬の賊兵はすべて海底の藻屑となつてしまひ、生きかへるもの 僅かに三人

あゝ何たる愉快なことであらう。今に思ひ起すも痛快の至りである。まして當時の皇室、國民の喜びはどんなであつたらう。

龜山上皇御製

四方の海 波をさまりて のどかなる

我が日の本に 春は來にけり

神國 日本

皇位のさかんなること天地と共に窮りなかるべし、

天壤無窮

これは神勅である。神祖の一大豫言である。

萬世の國運を約束なされた神祖の一大慈悲心である。

武風やうやく邊土にゆきわたる

鎌倉日本への試練が元寇であつた。

日本人に、神國日本のしるしを強く感ぜしめたのが、元寇であつた。

とにもかくにも目出度いことであつた。

我國史あつて以來の大難であつただけにその大勝も亦千古に類ない目出度いことであつた、當時、上下一致、よく國難にあたつた。

元使始て來てより約二十年

大元國に對して、少しもゆるぎなかつた當時の我々の先祖の意氣、

長期抗戰の光榮ある歴史である。

現在、日本は新東亞長期建設に邁進してゐる。元寇時代の祖先に思へば、また、新たに使命遂行の熱意が湧き出づるではありせんか。

當時の元はとて今この國民政府の比ではありません、東洋、西洋を足蹴にかけた元軍であります。

私達は、誓つて、祖先の意氣を忘れてはなりません。

龜山上皇の御稜威、執權時宗の英明果斷、

戦に従つた勇將忠士の活躍、

忠實糧食を運んだ百姓

軍用金の用立てに苦心した町人

祈りに祈りをこめた神官僧侶

家を守り田畑を守る老人、婦女

これらの人々の努力がうつて一丸となつた勝利である。

二十年間、よく堅忍持久したものである。

神風――

東路軍、江南軍合して將に總進軍せんとした、この時、この夜、將に神風現るべきな

らば、現はるべき絶好の機會、その日突如として起つた未曾有の颯風、神風といはずして何ぞ、

世の中には、この神風を偶然の如く云つた外人もあります。

偶然かも知れません。

しかし、東路、江南、兩軍合して、將に動かんとしたその時に吹いたのである。

一日遅れれば、全軍進撃したあとであつたらう、一日早ければ三千五百艘、十四萬の江南軍が到着しなかつたであらう。

その一番大切な時に吹いた風を偶然といふ外人は、強ひて、日本を恐れまいといふ空威張りにも似てゐる。

世の中には――

しかして元軍を破つたのはたゞ神風のおかげとのみであると云ふ者もある。

神風は文永の役に一回、弘安の役に一回しか吹かなかつたのである。

前後二十年の戦時状態を持久した、祖先の苦心を強ひて忘れんとするの者である。

弘安の役後といへども、尙我國民は決して氣をゆるしませんでした。

元は又何時攻めよせてくるかも知れないのです。

實際、元では残念に思ひました。

幾度も、これからも日本に出兵することを計劃いたしましたでしたが、終に實行に移すことが出来ませんでした。

元はこの大敗戦の結果、國力がにぶつて亡びてしまいました。

天罰と云ふべきでせう。

元を滅した明の太祖皇帝の如きは

「永久に日本を討つなどと考へてはならぬ」と、子孫を戒めてなくなつた程であります。

東洋はおろか、西歐諸國までもおびやかした元の勢をもつてしても、遂に我が小國に手を出すことの出来なかつたことを思へば、まこと、私共に心強さをおぼへさせるではありませんか、よくぞ勝つて下さつた。

と、祖先におがまずにいられないではありませんか。

あゝ日本民族

幾度も云つて來ました様に、當時蒙古の勢力は、支那と云はず、アジャ大陸より、歐洲大陸に波及し、實に世界的の一大脅威でありました。

漢民族は云ふもさらなり、インドも、ベルシャも、歐洲も、すべて蒙古兵の馬蹄にふみにじられたのであります。

而して、この大勢力に向つて、一撃をあたへたものが、實に日本人でありました。

海中の一小島國が、大陸の世界的な勢力に一撃を與へ、其の勢力を挫いたと云ふ事は歴史上にかつて見ざるの事柄であります。

この事は、如何に日本が舉國一致すれば、偉大なる力を出だしむべきかといふことを證明したものであります。

日本が蒙古を打破つた一事は、日本を世界的存在にする第一歩になりました。

西洋人から鬼の如くにおそれられてゐた元を大敗せしめた日本、當時の世界人には、まつたく、日本の國を不思議な國と感ぜしめずにはおかなかつたものです。

イタリ人のマルコ・ポーロは元にて、後に、歸國し、東方見聞記と云ふ書物を書いて日本の國は神の國、寶の島と紹介いたしました。

この一事は、單なる見聞記といつてしまふ譯にはゆかぬ、一大影響を世界にあたへました。

近代世界文化は、日本の元軍撃退から始つたものだと云つて、決して誤りがないのであります。單に元を破つた。それだけではないのであります。

日本人の力が、如何に世界に大きな影響をあたへるものか、我々日本人ですらおどろく程であります。

日本が元軍を破らなかつたら、マルコ・ポーロは決して、東方見聞記に、日本を神の國、寶の國と記されなかつたであります。

マルコ・ポーロの紹介によつて、日本は世界の黄金島だと云つて知られました。

それは、世界人にどんなにか、あこがれの心を持たせた事でありませう。

日本に行つて見たい。日本に行きたい。

マルコ・ポーロの話がひろまるにつれて、全歐洲人の心の中に、日本をあこがれさせました。

その第一人者が、イタリ人のコロンブスでありました。

たとへ如何なる苦難も來たらば來たれとコロンブスに大西洋を西に漕いで、日本を求めさせました。

それが、日本に到る前に、北米大陸を發見させました。

北米、南米、兩大陸の發見は世界史の上に偉大なる變化をあたへました。

アメリカ大陸發見が、現代歐洲の狀勢をくりひろげる一大原因となりました。

思へば日本あつて、現代歐洲をつくり上げたのであります。

そして、今また、まさに、日本民族は、光榮の世界史を創造しつゝあります。

元寇によつて、近代世界が開かれ、支那事變によつて、次代の新世界がつくられつゝあります。

私共は鎌倉時代の祖先に恥ぢざる功績を現代に於て、建設しなければなりません。それが、我が日本の使命であり、我々日本人の血の要求であります。

九、戰國時代

元寇おさまりて

青年執權時宗十八歳にして元使に突如接し、斷乎として、これをしりぞけ、斷然龍口に杜世忠等を斬つたのが二十五歳、最後の使を博多に斬つたのが二十九歳の時でありました。三十一歳で十餘萬の元軍をみな殺しにして、國難をしりぞけたのであります。弘安七年、三十四歳遂に病を得てなくなりました。完く、時宗こそは元寇を防ぐために生れ來たつた様なものです。

前後二十年、舉國一致、日本民族は本然の姿に立ちかへつて、國運を賭してよく堅忍持久いたしました。

元はこの爲に亡び、世界史はこれを原因として新展開いたしました。

時宗、若くして逝くなつたが、彼が抱いていた考は、進んで元軍を敗り、再び蒙古

をして起つ能はざらしめんといふ事にありました。所謂東洋永遠の平和建設の血の叫びが、時宗の體中にたぎつてゐました。

始まつた時局を、時局のまゝに進めてゆくべきが大切なことでありました。

しかるに時宗は、弘安の役後三年、遂に逝くなつてしまひました。

その後をついだ貞時は僅か十四歳でありました。

二十年の大事變の後でありましたから財政に困難が來たしてゐます。

日本は大陸に偉大なる影響をあたへつゝ、時宗の死と共に、また／＼矛を收めてしまひました。

しかし、一度わきたつた日本人の血は遂に收まるわけにはいかなかつたのであります。

これを深く心配遊ばされたのが後醍醐天皇であります。

日本の使命を忘れた北條氏、日本人の血の叫びに耳をふさいだ北條氏、父祖時宗の

功績が如何程に高かつたにしても、見逃すことは出来ません。

天皇は皇子護良親王と共に武家政治をたほして、政權をとりもどさんとして、正中の變となり、元弘の變と進み、北條氏を滅亡せしめましたが、残念なことに再び足利氏の幕府をひらくこととなり、その足利氏も衰えて戰國争亂の世となりました。

吉野朝時代

吉野朝時代の事は己に諸君のよく承知されてゐる歴史です。

北條高時、足利尊氏、今思ひ起すも、顔に唾でもはきかけてやりたい様な心持ちになる亂臣賊子も表はれました。

しかし、それと同時に、私達の心の奥底から感激させる幾多の忠勇無比の將士のあらはれた時代でもありました。

吉野朝六十年の間程、忠臣孝子の出でた時代はなかつたのです。

そして、それ等の人達は、それ／＼神とし、まつられ、永遠に日本民族の鑑として不

滅の光をはなつてゐます。



北畠親房

湊川神社—楠木正成
 名和神社—名和長年
 藤島神社—新田義貞
 四條畷神社—楠木正行
 菊池神社—菊池氏一族
 靈山神社—北畠親房
 阿部野神社—北畠顯家

吉野五十年史！

そこに順逆を誤まれる者もあつたであらう、悲劇もあり、血もあり、涙もあつたであらう。

しかし、この五十年史こそは、我が民族性を磨き上げた試練史であつた。

今は神といつきまつられてゐる、當時の忠臣義士は、永遠に日本人の血液の中に生きて世道人心のむくべき方向をあか／＼と輝してゐます。

噫 大楠公

豹は死して皮を留む

あに偶然ならんや

湊川の遺跡 水天につらなる

人世限りあり

名は盡くるなし

楠子の精忠 萬古に傳ふ

大楠公こそは、永遠に日本人の鑑でありませう。

吉野五十年の歴史は一人の大楠公を後世に残した。それだけでも、忘れる事の出来ぬ時代であります。

楠木正成は、戦争も上手でありました。

何十倍といふ關東勢も、正成には手も足も出なかつたのであります。

しかし、楠公の楠公たるところは決して戦争がうまかつたといふことではありませぬ。

日本人としての本當の生き方をしたといふことであります。

元弘元年、後醍醐天皇、難を笠置に避けてはじめて、楠木正成を召されました。

これも、神、夢に現はれて告げられたと伝えられてゐます。

夢のお告げによつて召されたのが楠木正成であります。

召された頃は河内の一豪族にすぎませんでした。地方の土民の亂を鎮めて兵衛尉といふ位をもらつてゐました。

今の警察署長位であります。

賊將は何十萬といふ味方をもつ、執權北條高時であります。

執權といふと、現在の總理大臣よりはもつと、高い地位といふことが出来ます。この賊將を破る爲に出て來たのが一兵衛尉の正成です。正成の部下は五百か六百しかありません。

この正成が召されて御前に出られた時に

「正成の未だ死せざるを聞かば、則ち、また宸慮を勞する勿れ」と、申上げてゐます。

一兵衛尉の身分で、

私が生きてゐる間は決して心配をしないで下さい。

と、申上げた大楠公であります。

五六百の部下しか持たなかつた楠公が數十萬の賊軍をむかへて、必ずこれを征伐して見せる、いや、征伐しなくてはならぬ、國の爲天皇陛下の爲に、必ずしなくてはならぬといふ堅い決心と、必ずして見せるといふ日本人をしての血の叫びであります。

支那事變で、上海の特別陸戦隊が数十倍の敵とよく戦つて、これを撃退いたしましたし、日本人の血のなかには「出来ない、不可能」といふ事はないのです。

時宗が世界を征服した元軍と敢然と戦つてこれを撃退いたしました。

楠公は、必ず自分の力で賊軍を平げて見せる、平げなければならぬと信念してゐました、まことに、おどろくべき偉大なる心であります。

「國家の大事を救ふ者は自分でなければならぬ」

この壯なる心は、私達に常に力強い元氣をあたへて呉れます。

そして楠公は賊の大軍を全部自分のところをひきつけて、憚まして居りました。

したがつて、新田義貞がやす／＼と鎌倉を攻め、北條氏を亡すことが出来たのであります。

新田義貞が勤王の軍を起したのも、その他各地から、ぞく／＼と勤王の軍が現はれて来たのも正成が、勇ましく戦つてゐる様子に心うたれたからであります。

北條氏を征伐し、亡す事の出来たのは、まったく楠公の力でありました。

それでも楠公は建武の中興の時に決して、立派な地位も、位もいただきませんでした。新田義貞などくらべると、とても、くらべものにならぬ程の地位の低いものであります。

足利氏が謀反を起こした時も、楠公の計は用ひられない様なことも度々ありました。

それでも、正成は不平もいはず、不満ももらさず生命を捧げて戦ひました。

死の戦場に向ふにあつて、しかも正成は

青葉しげる櫻井の 里のわたりの夕まぐれ

木の下かけに駒とめて 世のゆく末をつく／＼と

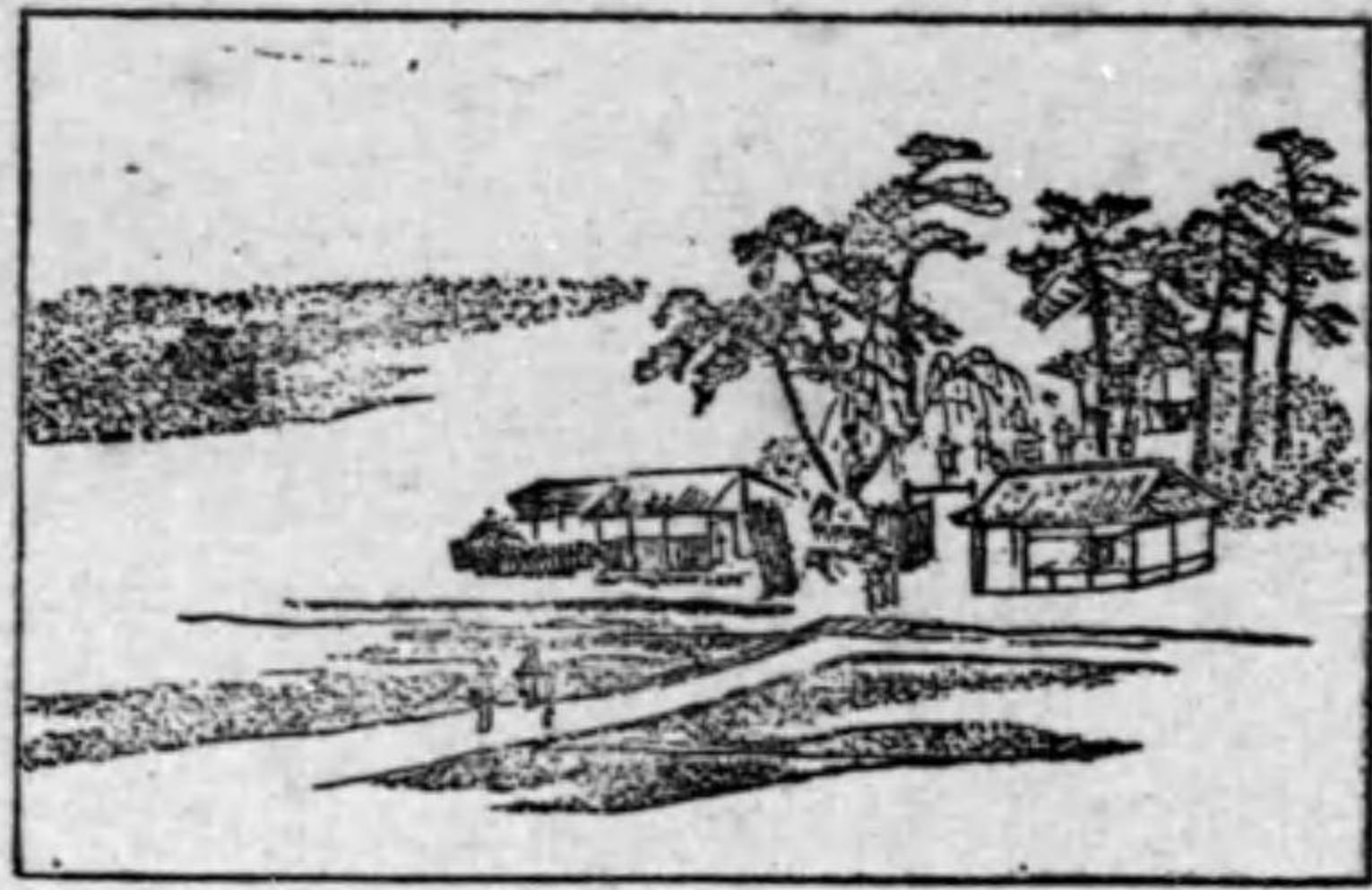
しのおよろひの袖のへに 散るは涙か、はた露か

正成涙をうちはらひ
 我子正行よびよせて
 父は兵庫におもむかん
 彼方の浦に討死せん
 汝はこゝまで来たれども
 とくくかくれ、故里へ

父上如何にのたまふも
 見すてまつりて我一人
 いかでかへらん、かへられん
 この正行は年こそは
 未だ若けれ、もろともに
 御供つかへん、死出の旅

汝をこゝよりかへさんは
 我れ私のためならず
 己れ討死なさんには
 世は尊氏のまゝならん
 早く生ひたち、大君に
 仕へまつれよ、國の爲

と、「私が死んだら、世の中は足利氏の自由になつてしまふにちがひない」と、思ひ



楠木正成の廟

つゝも
 「きつと天子様をまもれよ」
 と、子孫に戒めて居ります。
 あくまでも、大君の爲につくす、といふのが楠公の
 考であります。子孫はみなこの考をうけついで、一
 族、ことくく國難に殉じました。更に死ぬ時には
 「七度び生れて、朝敵を亡ぼさん」
 楠公は決して、手柄がみとめられてはをりません、
 たくさんの、褒美を、いただいてはいません、それ
 でも一族、ことくくの生命を朝廷にさゝげ、更に

「七度生れて、朝敵を亡ぼしたい」と云つてゐるのであります。
 これこそ本當に日本人の血の叫びであります。

楠公は死んで、二度と生まれませんでした。これから、後世の人は、楠公の風を聞いて、すでに今までも、たくさんのお忠臣となつて働き、今後永遠に世道人心を正しく、美しく導くところではありません、七生報國どころではありません、永遠に生きてゐるのであります。

戦國時代

武士は國內に武勇の風をゆきわたらせ、遂に大敵蒙古を撃退させる程になりましたが、その後、遂に元を攻略するといふ事にまでゆきませんでしたので、こんどは次第に國內が亂れ、勇武の風は、内にあふれ、戦國時代といふ、百年間も、戦争が絶えなかつたといふ時代をつくりあげてしまひました。それが織田信長、豊臣秀吉によつて鎮められ、秀吉は、この國內の力は、どうしても我國の最大使命である、大陸經營に使用せねばならぬと考へ、朝鮮征伐を實行しましたが、成功しないうちに逝くなつてしまひました。

徳川氏が江戸に幕府をひらいてからは、キリスト教の爲に鎖國といつて、國を鎖して、大陸との關係をたちました。やがて、たくはへられた力は、使命遂行の爲にふるひたつ折がいよ／＼やつて來ました。

大化の新政以來千年、日本は再び大陸經營にのりだしました。それも、武士階級といふ特別の人達の力でなく、武士階級は、全國民の中に再び没し去つて、國民總力の姿になつて、愈々大陸經營に乗り出すことになりました。

十、東洋の危機

白人の侵略

マルコーポーロが「東方見聞記」を出して以來、西洋人は、西洋以外に、地球の寶庫が無數にある事を知りました。

殊に、日本は黄金の國、寶の國と云つて紹介してあるものですから、西洋人の一番

美やましく思つたところでありました。

黄金が得たい！

寶が得たい！

白人は、一齊に探検を思ひ立ちました。

日本に行きたい！

東洋に行きたい！

そうして、そこにある寶が、黄金が欲しい。

日本が元を破つた。

それがマルコ・ポーロに東方見聞記を書かせた、その東方見聞記が西洋を震撼させた。

日本も知らぬ、支那もそれを知らない。

しかし、元來に慾深の白人達は起ち上つた、今まではお互に攻め合つてゐたもの

が、海外に魔手を伸ばし始めた。

他國にある寶を全部自分のものにした

他國を侵略して、自分達が利益を得たい

まことに、もつて、厄介なものは白人であります。白人は侵略の民族だと云つて、決してさしつかへがないと思ひます。

それが遂にアメリカ發見となり

印度航路の開拓となつて、魔手を次第に東洋にのばして來ました。

アメリカ大陸を發見した白人は、アメリカに古來から住んでゐたアメリカインディアンを征服して、南北兩アメリカを白人の手に收さめてしまつた。

更に、濠洲をとり、アフリカをとり、印度を攻略し、シベリヤをとつて、遂に支那四百餘州と云ふものをとつてしまひたいと考へるようになりました。

東洋はだん／＼と白人の爲に侵略されて來ました、アジアの危機がやつて來ました。